

日本南アジア学会第 31 回全国大会 報告要旨集

Proceedings
The 31st Annual Conference
The Japanese Association for South Asian Studies (JASAS)

2018 年 9 月 29 日, 30 日
金沢歌劇座 (石川県金沢市下本多町 6 番丁 27 番地)
29-30 September 2018, The Kanazawa Theatre

第 31 回全国大会実行委員会
Organizing Committee of The 31st Annual Conference

JASAS 日本南アジア学会
The Japanese Association for South Asian Studies

9月29日(土) / 29 Sep. (Sat.)

Time	Session, Room	Pages
13:30-14:28	自由論題 1/Sesssion1, 第5会議室/Meeting Room 5	1-2
13:00-14:28	自由論題 2/Sesssion2, 第6会議室/Meeting Room 6	3-5
13:00-14:28	自由論題 3/Sesssion3, 第7会議室/Meeting Room 7	6-8
13:00-15:00	英語テーマ別セッション 1 /Panel in English 1, 大集会室第1区画/ Auditorium the First Division	9-12
15:00-16:28	自由論題 4/Sesssion4, 第5会議室/Meeting Room 5	13-15
15:00-16:30	英語テーマ別セッション 2 /Panel in English 2, 第6会議室/Meeting Room 6	16-19
15:00-17:00	日本語テーマ別セッション 1/Panel in Japanese 1, 第7会議室/Meeting Room 7	20-23
15:05-17:05	英語テーマ別セッション 3 /Panel in English3, 大集会室第1区画/Auditorium the First Division	24-26

9月30日(日) / 30 Sep. (Sun.)

Time	Session, Room	Pages
9:00-11:28	自由論題 5/Sesssion5, 第5会議室/Meeting Room 5	27-31
9:30-11:28	自由論題 6/Sesssion6, 第6会議室/Meeting Room 6	32-35
10:00-11:28	自由論題 7/Sesssion7, 第7会議室/Meeting Room 7	36-38
9:30-11:30	英語テーマ別セッション 4 /Panel in English4, 大集会室第1区画/ Auditorium the First Division	39-42
13:00-17:00	日本南アジア学会30周年記念連続シンポジウム/Symposium 大集会室第1区画/ Auditorium the First Division	43-

「史実」としてのマニプル王国

村上武則

東京外国語大学 / 京都大学

2018年3月にグジャラート州にて行われたマニプル州首相ノントムバム・ビレン・シンのヒンディー語のスピーチにおいて、マニプル州を含む現在のインド北東部が神話の時代からインドの一部であったという主張が為され、彼はこれにより野党や州内のナショナリストたちから猛烈な批判を浴びることとなった。マニプル王国がかつてインドとは別個の独立国であったことには疑いは無く、このような発言をヒンドゥー至上主義に基づく荒唐無稽な捏造として退けることは容易いが、その一方で反論の根拠として使われている「AD33年からの歴史を持つ独立国家マニプル王国」といったメイテイ人民族主義者たちの言説を鵜呑みにすることも危険を伴う。マニプル史の根本史料である王統記『チェイタロル・クンババ』の写本群に対する文献学的批判は未だ不十分あるいは杜撰なままであり、17-18世紀のヒンドゥー教ヴィシュヌ派への集団改宗以前の記録もほとんどが失われている状態で、隣接地域の同時代史料も限られた近世以前の王国史像を辿るには大きな困難が伴う。そして皮肉にもインドから距離を取ろうとする立場の者たちの間ですらもインドの他地域と同じように神話や文学と歴史を混同する態度が見られることは、マニプル州があくまで現代インド的文脈の中に置かれている状況を雄弁に物語っており、外部からの観察者に対してマニプル州がインド連邦の縮図としての性格を持ち合わせていることを強く印象付け、またBJPおよびRSSによるヒンドゥー主流派への同化主義キャンペーンが猛威を奮いつつある現在のインド北東部において「反ヒンドゥトヴァ言説が大してヒンドゥトヴァとの質的差別化を出来ておらず、かつ大衆受けしない」という苦境をも象徴している。

それではマニプル王国史について史料的根拠をもって安全に語る事が出来るのはどの程度の範囲の話であるのか、本発表ではその制約と限界について明らかにした上でマニプル州における歴史言説の類型化を行い、誰がどういった歴史像を求め利用しようとしてきたのか、何を視界から背け見ようとするのか、また特定の立場の人間にとって都合の良い言説の需要が喚起され再生産される仕組みについて検討する。ここで現在の批判的マニプル史観の形成に影響力を持ったと考えられるワヘンバム・イボハル・シンとガンムメイ・カメイという二人の歴史家の著述を基軸に据え、発表者自身の現地での調査体験に基づく反省も込めて、イデオロギーから離れたマニプル王国とはどのような歴史的事実であったのかをアウトサイダー寄りの立場から描き出そうと試みる。そして論争の形や構図自体は見慣れないものではなくとも、北東部の歴史を語る際にはインドの他地域とはまた別種の難しさが存在することを伝えられれば幸いである。

マイルール藩王国の「伝統的」カンナダ語詩文学にみる王の表象

太田 信宏

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

本報告は、マイルール（マイルール）藩王国の宮廷文学（王を中心とした宮廷を描いた／のために書かれた「伝統的」詩文学）の特徴、なかでも王（権）の表象のあり方を、19世紀初頭にカンナダ語で書かれた『クリシュナ・ラージャの戯れ *Kṛṣṇarāja Vilāsa*』（以下、『戯れ』と略記する）の分析に主に基づいて考察する。近世期の詩文学と宮廷との関わりや英領期の藩王国の歴史について、近年、それぞれに研究が活発化しているが、藩王国研究で「伝統的」詩文学が利用されることはまれである。藩王国研究の史料として現地語文学作品が持つ可能性を考察することも本報告の目的である。

ヴィーラ・シャイヴァ派（別名リンガーヤト派）のマッドギリ・ナンジャッパが1810年代後半に著した『戯れ』は、伝統的な韻律形式のひとつであるヴァールダカ・シャトパディ（6行1聯）形式で書かれ、序章を含む全6章からなる。主に解題からなる序章に続き、第2章から第5章までは当時のマイルール藩王クリシュナ・ラージャ3世（在位1799年～1868年）の一日が描かれ、最後の第6章で、王による巡礼と王女誕生が取り上げられている。

序章において、著者はヴィシュヌ神と同一視する王への自らの忠誠と献身を述べ、王への献身的奉仕の一環として自著を位置づけている。王に奉仕する自らの「清らかな心」で見たままのこと（「実際にあること」）を文学作品として描いたことを強調する著者は、報酬を目当てにして、常套的な美辞麗句や修辞技巧を用いて王を讃える詩をつくる詩人たちから自らをはっきりと差別化する。このように、王への自らの献身の念によって詩作そのものを、さらには、伝統的な詩文学の規範からの逸脱を正当化するのは、植民地期近代以前には見られなかった新しい詩作態度と言える。

序章の自著解題に対応するように、『戯れ』では、それまでの宮廷文学が描く理想的な姿とは異なる「現実」が生き活きと捉えられている。王からの贈物への即物的な関心を抑えきれず、ときには贈られた物への不平を訴える人々、当番交代の懈怠が発端となった侍従同士の諍い、よこしまな役人、侍従たちの必死の努力でようやく静謐・秩序が保たれる朝廷の描写などを、例に挙げることができる。一方、クリシュナ・ラージャ3世は、そうした周囲の「現実」とは対照的な理想の王として描かれる。さまざまな名目で贈与・寄進をふんだんに行う気前の良さが繰り返し強調されるとともに、クリシュナ・ラージャ3世が複数の政務を同時並行的にこなす場面が挿入され、王の実務能力の高さが言挙げされていることが注目される。伝統的な詩文学は、理想的な王のもとで理想的な政治＝社会秩序が自ずから出現することを讃える。それに対して『戯れ』では、理想的な秩序の実現には、王を含む支配する側の巧みな統治という人為が重要であることが描かれていると言えるかもしれない。

英領期近代以前の宮廷文学作品との比較で注目される『戯れ』の特徴として、ほかに、王家の女性（王母、王妃、王女）の題材化を挙げられる。19世紀後半、王家が藩王国の象徴として表象されたことが指摘されているが、王家内の王と女たちとの関係を描く『戯れ』のような宮廷文学の延長線上にこうした表象をおいてみることも必要であろう。

アッサム州における農業離れと耕地利用の変化ーカースト・ヒンドゥー教の村落の事例より

浅田晴久

奈良女子大学研究院人文科学系

インド北東部のアッサム州は、低平な沖積地形と豊富な降雨という農業に適した自然条件に恵まれているが、農業部門の発展が遅れており生産性も国内最低水準にとどまっている。州政府は穀物生産量の増大を目指しているが、現場の農家ではむしろ農業への関心が低下しつつある。農業離れについては、タミル・ナードゥ州などインド他地域でも報告がされているが、州によって大きく異なる社会経済的要因が関係していると考えられる。

アッサム州で問題が生じる要因として、非熟練労働者の賃金が上昇していることが挙げられる。農業機械化がじゅうぶんに進んでおらず、稲作は雇用労働に頼る世帯が多いが、賃金の上昇により土地所有者が労働者に賃金を払うと、利益はほとんど残らない。さらに、公的分配システムにより他州産の米を無償に近い価格で入手できることも原因の一つである。アッサム州で生産される米がほとんど政府に買い上げされない一方で、州内の約 700 万世帯が配給の対象となっているため、農家の生産意欲を低下させる効果を引き起こしている。また、調査村を含むほとんどの村落では水田に灌漑が整備されておらず、天候に大きく左右される不安定な状態で稲作を行わねばならないという事情もある。

本研究では、農業離れの実態を村落レベルで明らかにするために、中心都市グワハティ近郊にあるムクタプル村を対象に世帯調査と聞き取り調査を行った。ムクタプル村はカースト・ヒンドゥー（現地語でアホミヤ）の約 500 世帯が暮らす村落である。村内で土地なし世帯は少なく、ほとんどの世帯が耕地を所有しているが、世帯あたり耕地面積が小さいため専業農家は 2 割に満たず、現在では他のビジネスのかたわら農業経営にあたる世帯が多い。調査村では農業に従事する者が減少傾向にあるだけでなく、労働力の不足や不十分な降雨のせいで作付されない耕地も一部で出現している。

調査村における農業離れは、耕地利用の変化の結果、景観の変化となって可視化されている。調査の結果より、村内の約 3 割の世帯で耕地の一部に樹木を植えていることが分かった。これは村内でもやや高位の場所にあり、本来水稻栽培には不適であり乾季畑作や苗代として利用されていた土地であることが多い。チークやマホガニーといった高級材として需要の高い樹木を植え、成長した後に売却して利益を得ることを目的としている。初期投資がほとんどかからず省力的であるが、じゅうぶんに生育するまで年数がかかるため、短期的な利益は見込めない。

植林以上に調査村で広くみられるのが耕地を池に転換するケースである。村内の半数以上の世帯が耕地の一部を池に転換して魚を飼育している。かつては屋敷地を造成するための土をとった後にできた窪地を利用することが多かったが、現在は現金収入のために重機を使用して積極的に耕地を掘削する世帯が現れている。土砂は建設用として需要があるため、掘削費用はかからない。また、魚の捕獲は近隣村に住むムスリムの集団が行うので自家の労力も不要である。

このようにアッサム州では、人口の多数を占めるカースト・ヒンドゥー教徒の村落において、不安定な稲作を敬遠して、より安定的な収入源を確保しようとする動きが出てきている。しかし、州内にはトライブやベンガル系ムスリム移民、ネパール系移民など他のコミュニティも多数存在するため、それらの村落においても改めて同様の調査が必要である。

カーストと産業勃興：インド・パンジャブ州におけるコンバイン企業家の事例

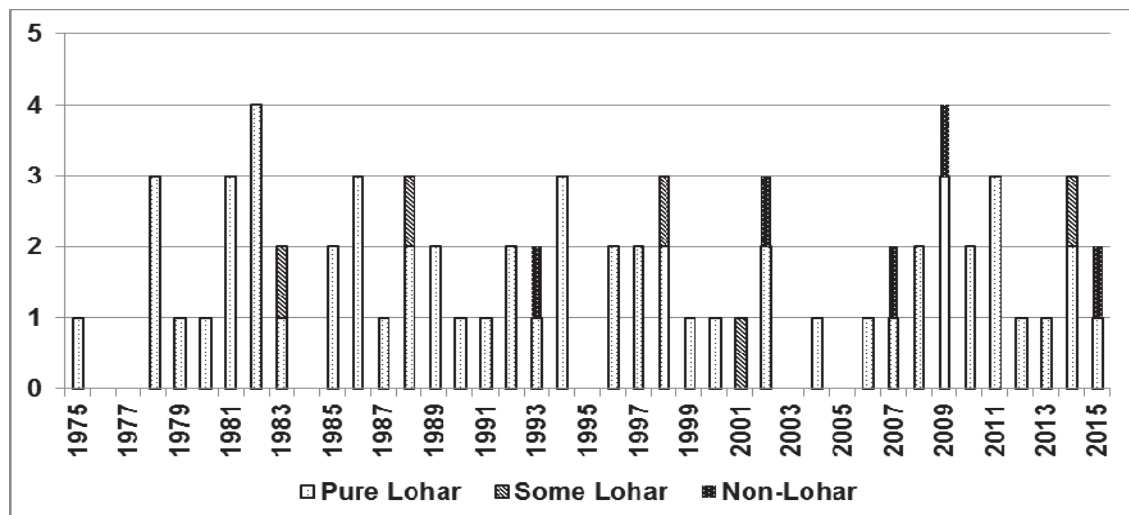
黒崎 卓

一橋大学経済研究所

[報告要旨]

インド農業において収穫・脱穀作業の機械化が近年急速に進展している。これを支えるのが、国産の大型コンバイン・ハーベスタ（以下、コンバイン）の供給と、単位面積当たり定額での収穫・脱穀請負契約という制度の普及である。小麦やコメの収穫期になると、インドの国道を土煙を上げて移動して次の作業圃場に向かうコンバインの姿が、もはや日常化している。インドのコンバイン産業については、次の3つの興味深い特徴がある。第1に、アフリカに輸出もしている数社の大企業と、年産数台からせいぜい数十台の零細・小規模企業とが併存している。第2に、企業の多くがパンジャブ州のナバ（Nabha）市周辺に集中している。そして第3に、企業家のほとんどが宗教はシク教、ジャーティはロハール（Lohar、鍛冶屋カースト）ないしタルカーン（Tarkhan、大工カースト）に集中している。コンバイン産業という新しい業種が勃興する過程で、このカーストの伝統や技能、人的ネットワークが重要な役割をはたした可能性がある。

この観点から2017年6月にコンバイン企業・企業家調査を実施した。調査はナバ市周辺のコンバイン製造企業に関する悉皆調査として実施され、全部で72企業のデータを収集した。大企業については1社を除くすべてをカバーしており、全インドのコンバイン産業の8割以上をカバーしていると考えられる。データクリーニングの終わった70社のデータを分析した結果からも、上記の3つの特徴が定量的に確認された。例えば、製造台数では上位5企業がサンプル全体の82%を占めていた。起業に関わった156の企業家名中129名（83%）がシク・ロハールないしシク・タルカーンであった。設立時の起業経緯と、設立年をクロスさせた分析からは、信用供与や製造情報の入手においてカーストのネットワークおよび伝統農村での職工カーストとしての技能が重要な役割を果たしたこと、カーストが新規参入の障壁となる度合（タルカーンとロハール以外が参入しにくい構造）は近年弱まっているが、他産業で見られるよりも緩やかな変化であることなどが判明した（下図はカースト別の起業年分布を示す）。数社の大企業と100社近い零細・小規模企業の併存は勃興期ゆえの一時的な規模分布ではなく、市場の不完備に対応した均衡である可能性が示唆されているものと解釈する。



インド・パンジャブ州農業構造の変容と新たな農村階層構造の出現

Transformation of Agrarian Structure in Indian Punjab and Emergence of New Rural Class Structure

藤田幸一 (京都大学)

大野昭彦 (青山学院大学)

[報告要旨]

インドの「緑の革命」の核心域であるパンジャブ州では長年、支配カーストたるジャット・シークが農地所有を独占し、それを自作経営する形で農業が維持されてきた。しかし、男子均分相続ゆえの農地細分化に伴う人口圧力の高まりを背景に、また 1990 年代半ば以降の国全体としての農業の比較劣位産業化の中で、ジャット・シークの多くの世帯が離農し、特に、カナダ、アメリカ、オーストラリアなどへの移住も進んできた。

ただし海外移住者を含む離農者は、基本的には農地所有を放棄することなく、農地を兄弟などの近い親戚やその他村びとなどに委託・貸付し、小作料を得る形で対応してきた。過去 2~3 年のわれわれの調査によれば、そのような農地貸借市場は、1 つの村に収まるのではなく、周辺の数か村を巻き込む広域市場として成立・機能している。また少数ではあるが、全くの土地なしがかなり大きな規模の借地経営をする事例もみられている。したがって、ある村では比較的多くのジャット・シークが農業経営に残る一方、それよりも多い村ではジャット・シークの大半が完全離農するといった動きが観察されるのである。なお、村の ST を中心とするジャット・シーク以外の世帯は、早い時期から農業労働を離れ、非農業就業に従事していることを付け加えておく。

われわれの調査のもう 1 つの大きな発見は、パンジャブ州の中でもジャランダー州のように早くから馬鈴薯の栽培が進んだ地域と、それ以外のコメ・小麦二期作地帯とでは、ビハール州などからの出稼ぎ労働者の行動に大きな差がみられた点である。すなわち、トラクターやコンバイン・ハーベスターなど農業機械化の進展は、季節労働者に対する需要を減退させていくことになり、コメ・小麦二期作地帯では、小麦の収穫時期から稲作の田植えまでの短期間のみ出稼ぎに来て、残りは故郷に帰るパターンが一般化したのに対し、馬鈴薯の作付けが広がった地域では、出稼ぎ労働者のかなり多くがパンジャブ州に残り、村のはずれなどに「スラム」を形成する形で定着したことである。定着した出稼ぎ労働者は、すでに 2~3 世代を経過している。

いったい、ジャット・シークのどういう世帯が農業に残り、今後どんな動きを示すのであろうか？パンジャブ州農村で起こっている大きな地殻変動は、同地域がインド農業、とりわけ政府が管理するコメ・小麦の主要供給源であるだけに、問題はきわめて重要であろう。

1 つの明らかな事実は、トラクターの所有・経営をめぐる動きであり、トラクターへの投資がその稼働率を高めるために借地を誘発しているという側面である。そのためか、小作料は年間の粗生産額の 50%前後にも達する高いレベルにあり、小作経営を圧迫すると同時に、離農した世帯の収入源として重要な地位を占めるという「構造」に結びついている。ただし、農地貸借市場を動かす要因はそれだけではなく、もっと細かく検討していく必要がある。

本報告は、コメ・小麦二期作地帯でかつ農業にあまり多くのジャット・シークが残っていない村を 1 つ、馬鈴薯が早くから入り、かつ農地借入に熱心で比較的多くのジャット・シークが農業に残り、ビハール州からの定着労働者もかなり多い村を 1 つ選定し、実施した調査結果の報告である。詳細なデータはやっと揃った段階であり、今回は予備的報告にとどめる。

日本語から見たヒンディー語のとりたて詞 (focus particles)

今村泰也、プラシャント・パルデシ
国立国語研究所

日本語の「だけ」「さえ」「も」などは文のある要素を際立たせ、特別な意味を加えることから「とりたて (助) 詞」と呼ばれている。現在、国立国語研究所の「とりたて表現の対照研究」プロジェクトでは、世界の14言語のとりたて表現を研究しており、発表者はヒンディー語を担当している。

本プロジェクトのリーダーである野田尚史はとりたて表現が表す意味を以下の6種類(3系列×2項対立)に分けている。

- 【限定】「だけ」「ばかり」「こそ」 例：時間がなかったので、第1章だけ読んだ。
- 【反限定】(例示)「でも」「なんか」 例：お茶でも飲みましょう。
- 【極端】「まで」「さえ」「も」 例：餓死寸前になって、雑草まで食べた。
- 【反極端】(普通)「なんて」「ぐらい」 例：料理が苦手でも、ゆで卵ぐらい作れるよね？
- 【類似】「も」 例：トイレは2階にもあります。
- 【反類似】(対比)「は」「なら」 例：現金はありませんが、カードならあります。

ヒンディー語で上記のとりたて詞に相当するのは、*hii* (だけ、ばかり、こそ)、*bhii* (も)、*to* (は、なら) などのいわゆる focus particles (以下、とりたて詞) である。以下に例を示す。

【限定】 *māī=****hii*** *jaantaa hūū*. (私だけ知っている)

限定は *hii* 以外に *keval*, *sirf* (ただ、単に、だけ) などの副詞によっても表される。

māī=ne is=ke baare mē ***keval*** *sunaa hai*. (私はこれについて聞いただけ)

【反限定】6種類のとりたて表現のうち、【反限定】を表すとりたて詞はなく、代わりに南アジアの言語に広く見られる部分重複 (partial reduplication, echo words) が用いられる。

kuch ***caay-vaay*** *milegii yaa nahī?* (お茶でも出してもらえるのかい?)

【極端】 *tak* (まで) のほか、*bhii* (も) も用いられる。

*us=ne merii baat sunii=****tak*** *nahī thii*. (彼は私の話を聞きさえしなかった)

*aisaa=to māī=ne sapne=mē=****bhii*** *nahī socaa thaa*. (そのようなことは夢にも思わなかった)

【反極端】 *to* が【反類似】(は、なら) のほかに【反極端】(ぐらい) も表す。

*tairnaa=****to*** *sab=ko aataa hai*. (水泳ぐらい誰にでもできる)

【類似】 *yah=****bhii*** *apne paapaa=ko bataao*. (これもお父さんに伝えて)

【反類似】 *vah maans nahī khaataa. par machliyāā=****to*** *roz khaataa hai*. (彼は肉を食べません。けれど魚なら毎日食べます)

ヒンディー語の代表的なとりたて詞である *hii*, *bhii*, *to* はとりたて表現の意味分類に位置付けると、下表のようにまとめられる。

限定	<i>hii</i> (だけ、ばかり、こそ)	反限定	
極端	<i>bhii</i> (さえ、すら、も)	反極端	<i>to</i> (ぐらい)
類似	<i>bhii</i> (も)	反類似	<i>to</i> (は、なら)

スーフィーの読み解く「ラヴァナ王の物語」

榊 和良

北海道武蔵女子短期大学

『ヨーガヴァーシシュタ』は10世紀半ば以降にカシュミールで編まれた哲学的譬喩物語とその解説からなる詩作である。『ヨーガヴァーシシュタ・マハーラーマヤナ』という異名が示すように、ヴァシシュタ仙がラームチャンドラに王として人間としていかに生きるべきかを説く形をとる全6篇3万詩節からなる大部な作品でもある。

近年、カシュミールを中心として収集された原典写本の研究が進められ、この夏、ようやく流布本の原典とされる『モークショパーヤ』(解脱への手段)の校訂が完了するに至った。新たな研究の成果として順次に刊行されてきた校訂本により、従来一元論的ヴェーダーンタの要素を特徴とすると評価されてきた流布本の『ヨーガヴァーシシュタ』は、原典が南インドに伝えられたときに形を変えていったものであることが明らかになってきた。

ヴァシシュタ仙がさまざまな譬喩物語や比喩表現を伴って難解な教えをわかりやすく説くという特徴から、この作品の流布本はインド中に広まった。そのため、流布本の縮約版としての『ラグヨーガヴァーシシュタ』が編まれ、さらに教えの要点だけをまとめた『ヨーガヴァーシシュタサーラ』や『ヨーガヴァーシシュタサングラハ』などが作られ、これらも広く知られることとなった。

中世インド文化の一翼を担ったイスラームの言語であるペルシア語でも、この縮約版が翻訳され、ムガル帝国時代には皇帝アクバル、ジャハーンギール、シャージャハーンと続く時代に、それぞれ異なるヴァージョンが生み出され、いくつかの物語に言及する哲学的論攷も登場した。叙事詩『マハーバーラタ』や『ラーマヤナ』と並んで、この縮約版のペルシア語訳写本は数多く残されており、その人気の程が窺われる。ジャハーンギール帝に捧げられた縮約版のペルシヤ語訳には注釈書が編まれ、語彙集も作られた。さらに宮廷画家らの手による精巧な細密画を伴った写本も、美術史家の関心を集めてきた。この作品がイスラーム知識人を魅了した理由はどこにあったのだろうか。

本稿では、それぞれの特徴をもつムガル帝国時代に編まれた縮約本の3つの異なるペルシア語訳、およびアクバル時代の桂冠詩人ファイズイーが著したとされる物語への言及を含む哲学的論攷において、ヴァシシュタの説くいかなる思想が彼らの関心を引き、イスラームの文脈でどのように解釈されたのかを分析する。特に、縮約版の第3巻8章から9章にかけて語られる「ラヴァナ王の物語」(魔術師の物語)をとりあげて、物語の解釈とそこに示されたヴァシシュタの哲学的教えの特徴とそのイスラーム的解釈を検討する。

覚醒状態から夢眠状態を経て第四位に至る諸段階を経て知に至る人間の無知なる心が生み出す現象世界は実体性をもたず、真実の知はブラフマンを知ることであると説くヴァシシュタの教えを、イスラーム知識人たちは、世界は絶対的存在たる神自身の顕現した姿であり、それを認識できない人間の無知なる状態をスーフィー道の修行階梯における魂の浄化の段階に相応させ、真実の知を獲得するための解脱への道を、自らの信における絶対的存在の本質の直観に見出したのである。

Śulka: A Less Known Term for Woman's Property and Dharmaśāstra

Dr. Anagha Joshi

Assistant Professor,

Centre of Advanced Study in Sanskrit,

Savitribai Phule Pune University, Pune

411007(INDIA)

The term *śulka* has been used in *Dharmaśāstra* sometimes in connection with the *āsura* form of marriage and sometimes to signify a form of woman's property i.e. *strīdhana*. The word *strīdhana* is constituted of two words namely, *strī* and *dhana*. They are connected by the relationship between possessor and the object possessed. The word *strīdhana* in its etymological sense expresses the idea of wealth or property belonging to a woman. Though the term has been used by *Dharmaśāstrakāras* the germ of the concept of women's personal property may be traced back to Vedic literature. *Kātyāyana* (400-600 A.D) for the first time attempts to define *śulka* as गृहोपस्करवाहानां दोह्याभरणकर्मिणाम् । मूल्यां लब्धां तु यत् ककचिच्छु ल्कां तत् पररकीर्मतति ॥ Here, the description of *śulka* as the price of the household gear and other necessities may reasonably be explained as the specific purpose of accepting it for the establishment of the newly married couple. This wealth is to be owned by the maiden and should be treated as a token of honour to the maiden. According to *Smṛticandrikā*, she alone is entitled to enjoy it and the husband is not entitled to enjoy it except in the case of distress. In this paper an attempt is made to understand and explain the concept of *Śulka* as woman's property. The Paper is divided into following heads:

- i. Introduction
- ii. The Concept of Woman's Property i.e *strīdhana* and *Dharmaśāstra*
- iii. *Śulka* as Woman's Property and *Dharmaśāstra*
- iv. Observations

Ways of Sensing, Ways of Being: Sensory Anthropology from/among The “Asias”

Chairs

Udeni M.H. Appuhamilage (Yamanashi Gakuin University)

Nakamura Sae (Kyoto University)

Presenters

Udeni M.H. Appuhamilage (Yamanashi Gakuin University)

Iida Reiko (Kyoto University)

Umemura Ayami (Tokyo University/JSPS)

Nakamura Sae (Kyoto University)

[purpose of session]

“Asia” has long been represented as an “exotic” and “sensuous” object compared to the “rational” subject of the West. As such, the Asian has been the ‘other’ who is conceptualized through rigorous ethnographic inquiry. However, the recuperation of sensation as a fundamental domain of social theory in sensory anthropology in late 1980s has turned this dynamic into an interesting problem. This is partly due to sensory anthropology’s questioning of the power of language in knowledge production. Critiquing the logo-centric, ocular-centric epistemologies that were pertinent in the long history of anthropology, recent developments in sensory anthropology show a strong trend toward describing “extra-linguistic” realities, questioning the role of signs and language as the main units of writing ethnographies of others’ lived experiences.

While such development seems essential to think anew about human subjectivities and sociality, one may ask how might sensory anthropologies look like when “Asias” are not merely a research object, but are both the researcher and the researched. Given that ethnography is a text that is co-constructed through sensual interactions between the researcher and the informants, positioned in a given context and time, is there a way to describe the ‘other’s’ sensory experiences and its dynamics within the parameters of his/her specific socio-cultural context, instead of comparing it to the sensorium of ocular-centric, logo-centric epistemologies consisting of five senses? What are the different senses that shape modes of being in different settings? What kind of sensory relations/hierarchies do those situations permit, what senses do they repress, and why? What factors/dynamics change established sensory orders? This panel critically engages with these questions through ethnographies from a diverse array of work related to sensory experience such as (but not limited to) art, psychotherapy, medicine and care done by anthropologists based in/working on various parts of South Asia, to explore the potentialities and challenges of sensory anthropology from/among the “Asias.”

An Anthropological Inquiry of Rotten Smells, Heavy Air and Trauma

Udeni M.H. Appuhamilage
Yamanashi Gakuin University

Despite its broad research agenda, one can argue that the attention paid to sensorium of odour in sensory anthropology is minimal. The explanation given is that human sense of smell (compared to that of other animal species) is weak and less-evolved. Also, smell is an elusive phenomenon; there are no words to name or categorize different smells, nor a way to ‘record’ it. The proposed paper engages with this matter by developing a case for the significance of smell in trauma experiences. Through an analysis of a clinical vignette of a trauma survivor from post-war Sri Lanka, the paper illustrates its complexity where it works in close combination with other senses, and also draws from socio-cultural, historical, and political realms in the construction of olfactory experiences. Examining its capacity to inform various modes of being, the paper challenges established sensory hierarchies that prioritize vision, and word/sound over smell. Taking this analytic further, the paper asserts how smell not only enables the experiencing subject to make meaning of trauma, but also serves as a medium of inter-and-intra subjective transmissions of trauma.

Transformations of “glancing” in performing arts in the context of changing media: The case of *lāvnī* in Maharashtra, India

Iida, Reiko Kyoto
University

This presentation aims to consider how development of media have affected the practices of performing artists. In particular, I focus on *lāvnī* in *tamāśā*. *Tamāśā* is becoming a part of popular urban culture in Maharashtra. One of the most important skills, or a part of repertoire of expression in *lāvnī* concerns the exchange the glances (*najar*) with the audience during the performance. This exchange of glances, in turn, was one of the reasons why *lāvnī* was considered ‘low class’ and ‘indecent’. As many have stated that “seeing is a kind of touching” in Indian context, glancing here would have been a sensuous physical contact, though quite different in its quality compared to *darśan*, or mutual sight between god and believer. These days, *lāvnī* can be seen not only in public theatre but also on TV, Video-CD and YouTube. This presentation considers how these changes have transformed the nature of *najar* between the performer and the audience and discuss what kind of far-reaching changes might be occurring to sensuousness and/or to the established sensory orders of both the performer and the audience in the context of changing media.

Sounds of Speech, Rings of *Manthra*: Case Study of Indigenous Medicine in Sri Lanka

Umemura, Ayami
Tokyo University/JSPS

Speech transmits the non-alternating, unique nature of its owners with the sounds of their voice, in addition to meanings of words or information; the latter function has a significant meaning in the medical treatment of indigenous medicine in Sri Lanka. In other words, the concern “Who’s voice?” is related to evil or sorcery among the Sinhalese people in Sri Lanka; in Sinhalese, *ho-waha* means evil breath, *katha-waha* means evil speech, and *as-waha* means evil eyes, and all of them have a common concern, namely “WHO’s” breath/voice/gaze?,” because these are unique individual characteristics.

To understand the power of speech we also have to consider “To whom the speech is uttered?” “Who listens to the voice?” *Manthras* are chanted for supernatural beings that either help or hinder the medical treatment. However, in order to protect themselves from any kind of curses or evils, people often rely on supernatural power. This study presents interactions between persons and parts of them, breath/voices/gaze, and supernatural beings by examining how people cope with these evil ways or mischief of supernatural beings carried by sounds of voices.

Bodily sensations and ethical relations: A reflection on the sensuous interaction between care-givers and dying residents at a home for elders in Sri Lanka

Nakamura, Sae
Kyoto University

One of the key debates in anthropology of the senses/sensory anthropology is whether one should ground his/her work on the cultural embeddedness of senses, or rather focus on the dynamic processes within which particular sense-skills emerge through interaction with the surrounding environment. This presentation is an attempt to think through this question through a case study of palliative care in a home for elders in Sri Lanka, with a special focus on the bodily sensation of the care-givers, including myself, that was experienced during interaction with the senile, dying residents. In conditions of scarce resources, floor staffs’ indifferent attitude to frail, dying residents seemed to be a strategy to cope with their

overwhelming daily chores. However, close look at their emotional/sensuous life revealed to me that responsiveness and sensibilities towards the suffering of residents provided condition for ethical relations with the dying ‘other’, in various, unique ways. By describing such sensuous interactions, and subsequent modes of interpretation that was accorded to these sensations, I will argue that in order to appreciate emerging care relations in such contexts as institutions, it is necessary to take into account both the plasticity of our sensorial experiences *and* the practical works of cultural categories which gives form to such experiences.

現代インドにおける異宗教間結婚をめぐる考察
A Study of Inter-Religious Marriage in Contemporary India

博士課程3回生 鶴田星子
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

[報告要旨]

本発表は、インド・マハーラーシュトラ州の都市部を調査対象地として、ヒンドゥー・ムスリムによる異宗教間結婚を、政治・社会の実態と関連づけながら分析するものである。インド社会においては、現在でもカースト内婚が結婚規範とされ、異カースト間結婚は忌避される現状がある。ましてや異宗教間結婚は禁忌とされることが多く、単なる家族間の問題を超越して社会問題に発展しかねない性格を持つ。しかしこのような状況のなかでも異宗教間結婚を行う人々は存在する。本発表では、インドの社会情勢の変化の中で、なぜ人々は危険な状況に置かされることになる異宗教間結婚を行うのか、彼らの実態がいかに変化し、結婚に反対する人々と彼らがどのように対峙してきたのか、という問題を、彼らを支援するボランティア団体の活動に着目して明らかにする。

これまで異宗教間結婚を扱った研究としては、ヴィーナ・ダス[Das 2010]が挙げられる。彼女は異宗教間結婚を、日常的な生活の中で繰り返し「新しいもの (newness)」に触れることになるものであり、その新しいものを取り入れていく過程で、道徳的な試行錯誤がなされるものであると分析した。そして彼女は、危険をはらんだ結婚生活の中で、どのように日々の生活についての交渉が行われているのかを明らかにするため、デリーにおける異宗教間結婚の夫婦とその家族にインタビューを行い、会話や忌避、おそれ、大きな喜びといった場面を描き出すことにより、ヒンドゥーとムスリムの相互理解の過程を描きだした。

しかし発表者がフィールド調査を行ったところ、困難に直面する夫婦が多数派であり、ダスの研究では異宗教間結婚の実情を反映しているとは言い難かった。近年では特に、ムスリム男性とヒンドゥー女性の改宗を伴う結婚は「ラヴ・ジハード」(結婚によって「ムスリムのテロリストが増えている」という言説を意味する)として糾弾され、政治的な対立を煽る手段とされている。このように異宗教間結婚は、結婚規範から逸脱しているがゆえの家族・親族間の問題と、宗教対立という社会・政治問題の両者を抱えており、個人・家族間の問題が容易に社会・政治問題に発展しかねない危険な状況にある。

発表者は2016年～2017年にかけて計4ヶ月、インド・マハーラーシュトラ州最大の都市であるムンバイ市、第二の都市であるプネー市にてフィールドワークを行い、その中で19組のヒンドゥー・ムスリム夫婦へのインタビュー、さらに2組のボランティア団体へのインタビューを実施した。本発表では、この調査を通じて明らかになった、彼らの結婚の動機、思想的背景や家族・社会との関わり方などを明らかにする。そして70・80年代に盛んであった学生運動の活動を通しての異宗教間結婚が存在していたこと、さらに90年代以降はその活動が変化し、自由恋愛が浸透しつつある現代ではボランティア団体を中心となって結婚を支援していることを指摘する。そのなかで、それぞれのボランティア団体の特徴や、設立の経緯、これまで関わり、解決した事例を検証し、時代により彼らの役割が変化していることに着目し、現代インドにおける異宗教間結婚と社会情勢の関わりについて明らかにする。

女性にとっての仕事と空間—バングラデシュの首都ダカにおける手工芸品生産工房の事例から

鈴木亜望

神戸大学大学院国際文化学研究所

本発表では、バングラデシュの首都ダカにおけるシルクスカーフ生産の事例を取り上げ、女性たちにとって働く先の工房はいかなる場所なのかを、家族の男性成員との関係と空間をめぐる社会規範から検討する。

バングラデシュの女性は、抑圧的な家父長制権力によって社会経済的な不利益を被ってきたとして、特に農村開発研究において言及されてきた。しかしながら 1990 年代以降、輸出縫製産業の本格化により、女性を取り巻く状況は変容する。バングラデシュは、男女を空間的に分離するパルダ規範のため女性の外出が忌避される社会であるにも関わらず、女性が縫製工員として外で働くようになったのは注目すべき変化だった。女性の縫製産業への参入を可能にしたのは、経済的な必要だけでも説明ができるものではなく、かといって社会規範に反する人々だということでもない。女性たちはパルダの再解釈をすることで、規範から逸脱せずに労働参入を可能にしている、という議論は特筆すべきである。

現在、特に首都ダカにおいては女性の外出は常態化していると言えるが、女性が男性と同様の活動ができることを意味するわけではなく、女性が安心して往来できる空間が開かれているわけでもない。女性が「ウチ」にいることが望ましいとされる社会規範と、女性が「ソト」で活動するようになった社会変化との間で、女性たちは自身の行動の解釈の必要に迫られていると言える。

こうした背景を踏まえ、バングラデシュの首都ダカにあるシルクスカーフ工房を対象にして、女性の労働と空間の関係を検討する。この工房は、NGO や個人の外国人によって支援されてきた工房であり、ローカルの販路だけでなく、グローバルな支援と販路によって維持されている。しかし、本発表で着目したいのは大きな文脈での支援ではなく、働く女性たちが社会規範からの逸脱を避けるように、身体的、表象的な安全性をこの工房での労働に求めていることである。

本発表の事例から、女性が働くことは決して自由な選択によって達成されるものではなく、男性との緊張関係があることがわかる。女性たちが仕事に出るためには、働く女性たちの自らの意志だけでなく、家族の男性に理解されることが必要である。そのために女性たちが用いるのは親族呼称を用いたネットワークであり、これが仕事への従事を可能にしていると考えられる。女性のネットワークには、ある程度均質な経済状況、社会状況の人々が繋がっているのであり、それらの状況を鑑みると、本発表の工房は、縫製工場の代替的な場であると言える。

工房で働く女性たちにとって、賃金労働の選択肢は多くない。その中で、工房を「女性だけで仕事ができる」場であるとして縫製工場と差異化し、ときには自分たちで作り上げていくことで、彼女たちは安全や貞淑さを保とうとしていることを明らかにする。

また、現代ダカの女性の行動規範は、パルダが示すような空間の区分というよりも、男性との交渉によって拡張の余地があるものだと考えられる。女性たちは、男性中心的な社会空間に女性の場所がないことを認めつつ、守られながらも経済活動を行う場所を模索している。ここに、男性と同等、対等を目指すような運動とは異なる日常実践が見出せる。

シンガポールにおけるインド舞踊の発展—芸術文化政策の黎明期を中心に

竹村嘉晃

国立民族学博物館

グローバル化が進む今日、インドの音楽・舞踊文化は、インド国内はもとより世界中に拡散するインド系や南アジア系移民・ディアスポラを中心に様々な人びとの間で受容されている。歴史的背景からインド系移民・ディアスポラが数多く暮らすシンガポールでは、インドの古典舞踊が「ナショナル」な伝統文化として位置づけられており、その継承・発展には国家との密接なつながりがみえてくる。

シンガポールへのインド系移民の流入は 19 世紀初頭からはじまったが、インドの舞踊文化がシンガポールで広く認知されるようになったのは 1950 年代以降のことである。インド系有志や公演のためにシンガポールを訪れたインド人舞踊家が芸術団体を設立したことで、インド系の子供たちには、インドの舞踊を本格的に習得する機会がもたらされた。その後、1970 年代末から 80 年代にかけては、インド系移民によって新たな芸術団体が設立されたほか、国の支援のもとでシンガポール国立大学芸術センターやラサール美術大学、南洋藝術学院などにインドの音楽や舞踊を学ぶコースが開講され、また政府系外郭団体の人民協会 (Peoples's Association: PA) が管轄する国内各地のコミュニティ・センターでもクラスが開かれるようになった。近年では、教育省と芸術評議会 (National Arts Council: NAC) の支援による芸術教育プログラムが中学校以上の教育カリキュラムに組み込まれ、国の伝統文化としてインドの芸能を体験・鑑賞する機会が増え、インド芸能祭やインド音楽コンクールなども開催されている。

このようにシンガポールにおけるインド舞踊の発展には、文化芸術振興を進めてきた国家が大きな役割を果たしてきたが、もともと英領期のシンガポールでは、植民者たちのアイデンティティの象徴である西欧の芸術文化が広く受容されていた。多民族社会の大多数を占める中国系シンガポール人たちは、キリスト教に改宗するなどして大英帝国への忠誠を示すとともに、西欧化したコミュニティの生成を目指し、バレエやクラシック音楽などを積極的に享受していった。その後、日本軍による占領統治を経た第二次世界大戦後には、シンガポール人としての文化的アイデンティティが模索され、舞踊がナショナル・アイデンティティと接合することになった。反植民地主義運動が高まるなか、西欧の象徴であるバレエは拒絶され、中国系、マレー系、インド系の民族的ルーツへ傾倒する動きが起こり、ナショナル・ダンス・カンパニーの設立と活動を通じて、多民族国家シンガポールが表象されていったのである。

本発表では、インドの音楽・舞踊文化がシンガポールで発展した歴史的経緯を概観しながら、今日のシンガポール政府が推進する芸術文化政策の黎明期といえる 1959 年から 65 年にかけて、国内各地で開催された“Aneka Ragam Rakyat (通称バラエティ・ショー)”を取り上げ、インドの舞踊文化がシンガポールの多文化社会を創成・促進するための宣伝媒体として表象されていた動きと、この活動に関与したインド系芸術団体の経緯について検証する。そして、こうした政治活動がシンガポールにおけるインド舞踊の発展やインド人芸術家たちのその後の活動にいかに関与を及ぼし、かつ芸術文化政策の指針へと通じていったのかについても考察する。

The Connectivity Panacea: geopolitical postures and developmental dilemmas in Northeast India

Chair

Edward Boyle (Faculty of Law, Kyushu University)

Presenters

Rohan D'Souza (Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University)

Mirza Zulfiqur Rahman (Visiting Faculty to TISS Guwahati)

Jabin Jacob (Associate Editor, China Report)

Edward Boyle (Kyushu University)

India's determination to "Look" and now "Act" East has been apparent since the 1990s, and the question of the role of the Northeast within this proposed reorientation of the national body has been much debated ever since. While Looking and Acting East forms one of the means through which India will develop its status as a regional economic performer and secure its position as a rising power, promoting connectivity through the Northeast is assumed to both aid in increasing the security and development of the region while tying it closer to the main body of India. The attention granted to 'fixing' the place of the Northeast is a result of the intense insecurity felt by New Delhi regarding its possession of a region largely defined by the state territories and national boundaries of Bangladesh, Myanmar, China and Bhutan, with only the narrowest of geographic linkages to the rest of the state.

While the increasing reach of the state being driven by this accelerating economic development is finding reflection in increased investment in the region, the developmental imperatives of nation-building are increasingly being manifested in a different form of Sino-Indian engagement. China continued claims to large parts of India's Northeast region as 'South Tibet' drives an intense mutual suspicion between these two Asian giants, which continues to shape the region's positioning as a borderland, a demarcated yet ambiguous space that exists at the confluence of the regions of South, Southeast and East Asia. This competition between India and China is often presented as evidence for the "post-colonial" understanding of borders in this part of the world, in which the inherited territories of decolonizing empires had to be secured within a post-colonial nation-building process recently characterized as "post-imperial trauma" (Miller 2013). This sensitivity regarding the place of the Northeast brings with it a festering "cartographic anxiety" that persistently threatens to lead to serious conflict, as in the recent Sino-Indian standoff over Doklam.

To cement its control over the region, New Delhi has recently sought to involve Japanese development aid, through JICA, in constructing the transportation arteries that will improve connectivity both within and beyond the region. The papers in this panel will critically examine the place of the Northeast within India, as well as its role as a theatre for an expanding geopolitical competition involving India, China and Japan, and seek to reflect upon the possible effects of such contestation for the region itself.

**Connectivity has no Pulse:
Rivers as a biological challenge to Infrastructure in North East India**

Rohan D'Souza
Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

A fresh burst of infrastructure projects — roads, large dams, ports, bridges and railways — are expected to herald globalisation 2.0. But this time around, Asia is going to be in the driver's seat. China's Belt Road Initiative (BRI) has set the tone: monumental in ambition, with plans to involve 65 countries and 60% of the world population to be connected by trade. The ASEAN region (comprising 10 countries in Southeast Asia), in its Hanoi declaration of 2010, have similarly concluded plans to connect through physical infrastructure, institutions and people. India too has a long list of infrastructural projects with acronyms such as BIMSTEC, the India-Myanmar-Thailand highway (IMT) or the Delhi- Hanoi railway link. Critics, however, worry that infrastructure is not just an economic mood, it is also becoming a type of financial extraction in its own right. And amidst this infrastructural enthusiasm, ecologists and riverine communities too are beginning to weigh up their options. While bridges rather than borders might be a good thing, cusecs rather than pulses might mean dramatically altering river systems and their existing biological coherence. My paper will explain the emerging discordance over turning rivers into volumes and overwhelming biological pulses with physical infrastructure in North East India. Can connectivity triumph without a pulse?

**Infrastructure Development in Northeast India: Examining Inequality and Exclusion in
the Development Promise of Economic Connectivity**

Mirza Zulfiqur Rahman
PhD, Indian Institute of Technology, Guwahati

The pace of infrastructural development in Northeast India is on the uptick since 2008. The past development experience in Northeast India has oscillated between complete neglect to sporadic interest based on particular needs of economic enclaves and military preparedness and strategic presence. From a scorched-earth policy of New Delhi in frontier areas such as Arunachal Pradesh, to the Trans-Arunachal Highway Project aiming to connect remote border areas, for instance, exemplifies the shifting priorities. The infrastructural development priorities in Northeast India have seen a lopsided pattern, and this project examines the core questions about the balance between the promise of economic prosperity and social inequalities, especially when India is engaging with Japan to intensify its infrastructure development via its Act East Policy.

The central and state governments of India cannot ignore the apprehensions and fears of local communities about the manner and method of infrastructure development that is being conducted in Northeast India. Infrastructure and connectivity development in Northeast India has had the effect of coupling unequal spaces within, and the path to ‘progress’ and ‘prosperity’ cannot hop, skip and jump such inequality. This paper examines the aspect of building trust and sustain a process of participative development in Northeast India, which is in harmony with local communities’ socio-cultural and economic aspirations and their traditional knowledge of the region’s sensitive ecology.

The China Factor in Northeast India’s Connectivity Projects

Jabin Jacob
Associate Editor, China Report

China’s Belt and Road Initiative (BRI) has through its high profile and rapid expansion put Indian strategic planners on the defensive given New Delhi’s lack of resources to match Chinese efforts. Nevertheless, as a country that has long highlighted the infrastructure deficit in Asia and had plans on paper for transferred connectivity for decades, India can claim some experience in the business of coming up with ideas and plans for connectivity projects. While the Indian government was always a little chary of the Bangladesh-China-India-Myanmar Regional Cooperation Forum (BCIM) and its successor, the BCIM Economic Corridor (BCIM-EC), wariness and disquiet appear to have solidified into opposition when the Chinese incorporated the BCIM-EC into the BRI without consultation with India. Subsequently, New Delhi has come up with fresh initiatives such as the Bangladesh-Bhutan-India-Nepal (BBIN) connectivity framework or tried to strengthen existing frameworks such as the Bay of Bengal Initiative for Multi-Sectoral Technical and Economic Cooperation (BIMSTEC) each of which leaves China out. And yet, China is very much part of the calculations for India and the

members of these forums. This presentation will attempt to explicate the extent to which China influences the debate and plans for some of India's connectivity projects in its Northeast.

Exploring Connections in Connectivity

Edward Boyle

Faculty of Law, Kyushu University

Since 2014, Japan has pledged support for India in developing connectivity within the Northeast, a pledge fulfilled through developmental assistance from JICA for the construction of roads and related infrastructure. This support for Northeast connectivity has resulted in two rounds of tendering for projects to be undertaken with JICA's backing. This solicitation of Japanese investment in the region was significant, as it signaled the determination of India to secure its control over a persistently volatile borderland region through the deployment of foreign capital, rather than its exclusion. In so doing, New Delhi was required to bring about a step-change in its governance of the region, restructuring its developmental institutions in order to comply with JICA's requirements. Japanese investment was sought as a specific counter-weight to China in the region, which continues to make claims over a vast expanse of it. The Indian media frequently trumpets the role of Japan in helping to secure the Northeast from China, although its investment to date could hardly have been further from China itself. Questions, therefore, remain regarding what both parties are ultimately hoping to secure through investing in connectivity. This paper will seek to set out the dots that will require some joining in the future.

看護師の国際労働移動における新たな潮流と課題：インドとフィリピンの事例より
The Emergence of New Trends, Issues and Characteristics of Nurse Migration
from India and the Philippines

司会

小田尚也（立命館大学）

報告者

辻田祐子（Bangkok Research Center, JETRO Bangkok）

Maria Reinaruth D. Carlos（龍谷大学）

小田尚也（立命館大学）

[セッションの趣旨]

世界的に看護師を始めとする医療従事者への需要の高まりが見られ、その結果、これらの職に従事する人の国際労働移動が活発化している。看護師の国際労働移動は決して新しい現象ではない。大規模な看護師の国際労働移動のきっかけとなったのが、1970年代のオイルショックである。原油価格が大幅に上昇し、経済ブームを迎えた湾岸諸国では、看護師を始め多くの労働者が必要となった。また現地のイスラム文化により女子の看護師のなり手がなく、海外からの労働者に頼らざるを得ず、本国より数倍も高い給与に魅せられ、インド、フィリピンを中心に多くの看護師が湾岸諸国に出稼ぎ出かけた。近年の需要の高まりは、先進国や比較的所得の高いアジア諸国における少子高齢化が背景にある。これらの国では国内で供給できる看護師およびケアワーカーが需要に追いつかず、そのギャップを海外からの労働者によって埋める傾向にある。またいくつかの先進国、途上国においては、メディカル・ツーリズムと称して、観光と医療を組み合わせ海外の富裕層を引きつけようとしており、この分野での看護師への新たな需要が生まれている。このような看護師を含む医療従事者へのグローバルな需要の高まりが全般的に見られる一方で、看護師受け入れ国の一つであるアラブ首長国連邦では”Emiratisation”と称して医療従事者を含む多くの分野で自国民の育成・参加を促進する動きや、米国やイギリスでの海外からの看護師受け入れ制限といった動きも見られる。

これらの変容する需要に対して、看護師の送り出し国はどのような対応し、またそこではどのような変化が見られるのであろうか。例えば、インドでは増加する需要に応えるべく、私立を中心に看護学校が急増し、2000年にインド全体で315校であった看護学校は、2015年には4500を越え、またフィリピンでは看護学部への入学者が一時的に急増するといった現象が発生した。アメリカやイギリスでの看護師受け入れ制限に対しては、フィリピンでは看護学校入学者が減少するとともに、卒業生は看護以外の職を選択する傾向が見られた。またかつては労働移動の決定要因の主たるものは、受け入れ国と送り出し国間の給与格差であったが、送り出し国の経済社会的発展に伴い、国際労働移動のパターン、プロフィールなど変化しつつある。インドでは、かつて看護師の多くはキリスト教徒の女性で、海外に働きにでかけるというイメージであったが、看護の仕事は今ではすべての宗教、カーストグループに選択される仕事である。また海外への労働移動を明確に望まないグループの存在が顕在化しつつあるなど大きな変化が見られる。

以上を踏まえ、本セッションでは、看護師の2大送り出し国であるインドとフィリピンのケースを取り上げ、送り出し国における変容する看護師の国際労働移動の現状と課題を報告する。日本を含む多くの国で高齢化による医療従事者への需要が高まる中、本報告は看護師の事例から医療従事者の国際労働移動に関する新たな視点と政策含意を提供するものである。

外国人看護師の非熟練化：シンガポールにおけるインド人看護師の事例

Deskilling of Foreign-trained Nurses at the Destination: The Case of Indian Nurses in Singapore

辻田祐子

Bangkok Research Center, JETRO Bangkok

[報告要旨]

近年、看護師の国際労働移動が増加している。先進国では高齢化などにより看護師不足がより顕在化しており、外国人看護師の雇用が進められている。なかでもインドはフィリピンに次ぐOECD諸国への看護師送り出し大国である。

国際労働移動の分析の枠組みのひとつとして、労働力を送り出す側のプッシュ要因と受け入れ側のプル要因の分析が挙げられる。途上国の看護師は賃金水準が低く、勤務環境が劣悪であり、訓練機会が限定されているため、給与水準が高く、最新技術の習得機会があり、生活水準の高い先進国や湾岸諸国に向かうとされる。また、看護師の国際労働移動はある国から他国への単線的な移動だけではなく、経由国で技術を習得しながらキャリア形成をおこない最終目的地にたどり着くことも知られている。しかしながら先行研究によると、先進国における途上国出身看護師は看護師のヒエラルキーのなかでも低地位、低賃金にとどまり、介護職やさらに医療とは無関係の非熟練労働に就いているケースも報告される。途上国出身看護師は先進国での就労にあたって出身国での資格がそのまま認証されることは少なく、さまざまな構造的な障壁にぶつかっていると指摘される。

報告者らは、インドで出生し、看護師教育を受け、インドの看護師資格を持つ「インド人看護師」を対象として、アジアでもっとも積極的に外国人看護師を受け入れる国のひとつであるシンガポールでの調査を2017年9月から12月に実施した。調査方法としては、機縁法(Snowball sampling)を用いてシンガポールの看護師資格を保有する36人、および同資格を保有しない64人を対象とした調査票を用いた調査を実施した。その上で、シンガポールの看護師資格を持たない10人への詳細なインタビュー、そのほかシンガポール人看護師、フィリピン人看護師、シンガポールのリクルートメント・エージェント、研究者らへのインタビューも行なった。

本発表では主に、(1)インド人看護師のなかでも誰が非熟練化(シンガポールで看護師資格を必要としない介護士などの職に従事)しているのか、(2)なぜ、またどのように非熟練化したのか、について報告する。分析の結果、(1)看護師資格を保有しない者の経済社会的な特徴、(2)インドの海外雇用斡旋業者と海外就労を急ぐインド人看護師の両方に非熟練化の要因があること、について論じる。

BPO 産業 (コールセンター) で働くフィリピン人看護学部卒業者
~彼らの職業選択および今後の看護師への復帰の可能性に焦点をあてて~
Nursing Graduates Working in the BPO Industry (Call Center) in the Philippines:
Focus on their Choice of Job and Return to Nursing Profession

Maria Reinaruth D. Carlos
龍谷大学

[報告要旨]

2000年代半ばにはアメリカやイギリスにおける外国人看護師受け入れ制限への政策転換がおこなわれ、その結果、看護学部を卒業したフィリピン人の失業問題が深刻化した。そこで、急成長しているビジネス・プロセス・アウトソーシング (BPO) 産業 (とりわけコールセンター) が彼らの主な就労先として注目を集めている。発表では彼らにとってのコールセンターの魅力は何か、また、彼らが今後看護職に復帰したいかどうかについて調べ考察を行なった。ここでは、フィリピンにおける BPO 産業の概要を説明したのち、看護学部卒業者を対象にしたアンケート調査 (n=208) の結果の一部を紹介する。調査の結果、看護資格の有無に関係なく、彼らがコールセンターで働く最も大きな理由は BPO 産業従事者と看護師の賃金格差である。それに加えて、彼らの看護職に対する認識や看護師になりたかった理由および仲間の影響も見られる。また、アンケート対象者の大半は将来看護職に復帰することを考えていないと表明している。以上より、現在、多くの看護学部卒業者の失業を抱えているフィリピン社会において、拡大する BPO 産業はその失業問題を緩和する一つの重要なバッファーとなっている。と同時に、フィリピンでは BPO 産業が経済成長の主な柱の一つとなりつつあることが言える。しかし、このような現象は看護師として充分有能であろう人が、大学でその教育を受けた高度人材にも関わらずかならずしもそのスキルが活かされない BPO 産業で働くということは一種の「国内ブレインドレイン」のではないであろうか。このようなことはインドの BPO 産業でも起こっている可能性は想像することもできるであろう。そのためには今後充分な調査が必要である。

インド人看護師の海外労働移動の意思決定に関する分析
An Analysis of Indian Nurses' Intention to Migrate Abroad

小田尚也
立命館大学

[報告要旨]

インドでは国内の看護師が大幅に不足し、その状況は深刻である。世界保健機構 WHO は、インドでは 240 万人の看護師が不足していると推計している。一方で、およそ 64 万人以上のインド人看護師が海外で働いていると見られ、看護師不足は、このような国際労働移動によって部分的に説明されるであろう。国内の看護師不足と国際労働移動が同時に発生する状況を理解し、看護

師の国際移動に影響を与える要因を特定することは政策立案の視点から極めて重要である。

本報告は、看護教育が活発な南インドにあるタミル・ナードゥ州での調査データに基づき、労働移動の意思を持つ看護師の特性を分析する。調査対象看護師の約 18%が海外労働移動の意思を持っており、そのほとんどは私立病院で働く看護師である。公的医療施設と私立病院との間の給与格差により、インドの私立病院の看護師は、より高い賃金を求めて海外に出かけるというインセンティブを持つ。しかし、インド国内で看護師が不足している現状において、そもそも何故民間病院で働く看護師の給与が低いのかという疑問がある。本報告ではその要因についての説明を試みる。その他の特性として、若く、独身で SC カーストに属する看護師も国際移動の意思が高い。国内の看護師の不足を軽減するためには、私立病院における看護師の給与水準を含む労働環境の向上など、政府の政策介入が必要である。

日本とインドは2011年に包括的経済協定（EPA）を締結している。その枠組みの中で、看護師・介護士の受入も検討対象となっており、将来的にインドからの受入の可能性がある。本報告は、看護師・介護士需要の高い日本と、これらの供給側であるインドの関係性を考える上で新たな知見を提供するものである。

Revisiting 'caste' and social cohesion in Marathi region

Chair

Kyosuke Adachi (Project Research Fellow, the University of Tokyo)

Presenters

Mizuho Matsuo (Associate Professor, National Museum of Ethnology)

Shraddha Kumbhojkar (Assistant Professor, Savitribai Phule Pune University)

Michihiro Ogawa (Associate Professor, Kanazawa University)

Katsuyuki Ida (Research Fellow, Ryukoku University)

Purpose of session

The purpose of this panel is to disentangle the composite nature of social grouping and to reconsider aspects of what has been called 'caste' in Marathi region. Since the advent of colonialism in the South Asia, social customs, matrimonial relationships, hereditary memberships and hierarchical structure in the local communities had been defined as 'caste' which was a self-consistent system peculiar to Indian society. Kinship, vocational, fraternal, religious and stratified groups were uniformly treated under the name of 'caste'; nonetheless the principles of social cohesion actually interweaved with each other. In the terms of modern Marathi discursive space, the narrative of caste was multifaceted *per se*. Caste genealogy books called "*Kul vrittant*" tried to explain their group identities from various sources. The grounds for their argument were their mythological lineage, social customs maintained by the group and historical records of the family property. The notion of 'caste' is to be reconsidered from a multi-dimensional perspective.

This panel focuses these various constituents of 'caste' and inter-disciplinarily discusses the dynamics of 'caste' formation and intervention. Four speakers trace back from contemporary to medieval times and inquire into various moments of social cohesion in Marathi regions. From the perspective of anthropology, Matsuo discusses the differentiation and stratification of social groups from the problem of eugenics in the twenties century. From the studies of modern history, Kumbhojkar deals with the colonial governmentality and formation/intervention of 'caste' hierarchy in the late nineteenth and early twentieth century through publications of 'caste' associations. From the socio-economic history, Ogawa analyses *modi* documents held in the Pune archives and discuss the multi-layered vocational groups in order to reconsider the theory of *watan* system. From the field of Indology, Ida deals with the issue of saintliness cloistered in *ashram* and re-examines social/religious belongingness in village communities. Through these papers, we comb through Marathi sources in various subjects, provide the illustration of hybridity in social cohesion and aim to contribute to 'caste' studies.

This panel is outcomes of the Grant-in-Aid for Challenging Exploratory Research (KAKENHI 15K12782), the Grant-in-Aid for Young Scientists B (KAKENHI 16K16970), and the Bilateral Joint Research Projects (Savitribai Phule Pune University) of Japan Society for the Promotion of Science.

**The formation of Class identity in Modern Maharashtra:
Debate on Eugenics, Sexuality and Birth control**

Mizuho Matsuo
(National Museum of Ethnology)

The issue of class and caste is mutually related and it is said that not only caste but class, especially middle class emerged during British colonial times. Middle class was historically constructed in Calcutta, Madras, and Bombay Presidency, where colonial administrative offices were built. Most of such groups came out not from traditional landlords or aristocracy, but from modern professions like white collar workers, government servants, and professionals such as doctors, lawyers and judges. It was necessary to be educated in English to enter new fields of modern, professional employment. In Bombay Presidency, for example, college education was dominated by the Hindu community and especially Brahmins took the largest share of the educational opportunities. Therefore, education, profession, class, and caste were interrelated in the category of creation of middle class in the early 20th century Indian society.

This paper discusses how class identity was originated from caste-based social groups in the process of modernisation and colonisation in 20th century Maharashtra. Taking debates on Eugenics and birth control movements done by high caste male social reformers as a case for study, this paper tries to understand the ways which they distinguished one selves from others and tangle situations over forming the class identity.

Resilient nature of Caste: Colonial Manifestations

Shraddha Kumbhojkar
(Savitribai Phule Pune University)

The Indian society has lived with the deeply exploitative caste system for over two millennia. Any system can survive for such a long period only by adapting itself to its surroundings. Caste system has adapted itself continuously throughout history and maintained its hold over the Indian social structure. In the colonial period, the system of caste underwent yet another change in itself and thus, seemed to have emerged in a new avatar. The proposed paper studies a few caste regulatory booklets from the modern period of history in order to furnish proof to the idea that caste has never been an eternal and unchanging institution. Caste Regulatory booklets of four middle status castes, viz. Aagari, Fulmali, Kite Bhandari and Prabhu castes are studied in the paper. The rules and regulations adopted by their local caste assemblies indicate that the perpetuation of the status of a caste was a major goal for which a regulatory framework was wilfully adopted by all members of these castes. Thus, resilience was the characteristic feature of the caste system that saved it from extinction.

Reconsidering the village community in the 18-19th century Western India

Michihiro Ogawa
(Kanazawa University)

It is well known that agrarian society in the pre-colonial India was managed by the village community under a village headman. Previous studies argued that peasants and village servants (artisans, religious persons, and service workers), who were called *balutedārs*, carried out their own professions hereditarily and maintained self-sufficient village life under the guidance of the village

headman. The duties and rights of these villagers were defined by watan under the Marathas, which was managed with family as a unit for generations. In this context, not only caste but also family played crucial roles in the pre-colonial agrarian society. Some families held *watan* of particular professions for generations while others did not hold it. The former was called *watandars*, and the latter was called *uparis*. In case *watandars* could not carry out their own profession, *uparis* acted as substitutes temporarily. In case *watandars* went away, the village community transferred watan from the *watandars* to *uparis*, who became new *watandars*. In this sense, village society in Western India under the Marathas was based on the watan system.

In a village under the Marathas, *watandar*-peasants regularly gave grain to the village headman, who distributed it according to the watan rule. Part of it reached the Peshwa government as a land tax, which was called the *ain-jama* (the main tax). The local government officers produced various kinds of documents on the land tax (the *ain-jamā*) including the annual report on individual tax-payers (*jamā patra*), which were kept in Maharashtra State Archives, Pune viz., Peshwa Daftar. By the analysis of documents on land tax and profession tax (*mohtarfa*) in the 18th-19th century, which is a new historical approach to studying the village community, this study made it clear some village servants (*balutedārs*) carried out some activities, especially agriculture, other than their own professions based on caste whether they were *watandars* or *uparis*. In short, the pattern of activities differed from family to family.

In the early British period, Inam commission investigated the local privileges including Inam land (a kind of tax-free land) and produced reports on each holder of the privileges. The holding of Inam land was closely connected to the watan system. The analysis of documents on Inam land clarified not that only a holder of Inam (*Inamdar*) managed watan including Inam land but that members of his joint family indirectly got involved in management of watan. In this sense, family was united more tightly for managing watan.

This paper made it clear that people did not always carried out their own professions on which their caste groups were based. In their wider activities, not a caste group but a family worked as a unit. Under the watan system, the unity of family was strengthened in the management of watan. A unit of family emerged as social group in the eighteenth and the nineteenth century-Western India.

***Sannyāsīs* and the Village Community According to the Early *Mahānubhāv* Scriptures**

**Katsuyuki Ida
(Ryukoku University)**

Mahānubhāv Sampradāy, founded by Cakradhar Svāmin in the 13th century, is known as one of the oldest tradition of popular *bhakti* movement in northern Mahārāshtra. Some of the early scriptures of this sect such as *Līlā-caritra*, *Ṛddhipur-caritra*, *Smṛti-sthaḥ* described how the people followed Cakradhar Svāmin, and formed religious community of *sannyāsīs* (renouncers) after Cakradhar Svāmin passed away.

The purpose of this presentation is to examine the sense of belonging to a community of *Mahānubhāv sannyāsīs* and its relationship with village or local community. In the first place, I shall consider the process of making a community consciousness as a religious sect on the basis of the Cakradhar Svāmin's dogma. Secondly, original caste identities deeply ingrained in *sannyāsīs* will be discussed. Thirdly, I shall examine the cases of the ambiguous relationships between *sannyāsīs* and village or local people.

Wartime Sinhalese (in Sri Lanka): Continuity and change of their ethnic consciousness from 1983-2009

K. A. Sandunika Hasangani
Tokyo University of Foreign Studies

Main attention of this paper is on the concept of Sinhalese consciousness, its continuity, and, change in the aftermath of the civil war in Sri Lanka. What kind of changes can be traced in the mindset of ordinary Sinhalese population on their collective self-image/identity after the war? First, the paper recognizes the conceptual difference between Sinhalese consciousness and Sinhalese nationalism where Sinhalese nationalism consists of an essential element of Sinhalese consciousness but not all forms of Sinhalese consciousness merit the nationalist characteristics. Next, based on a constructivist standpoint, this paper draws the origins and developments of Sinhalese consciousness and its multiple forms (ex. Sinhala-linguistic consciousness, Sinhalese anti-Christian consciousness Sinhala-Buddhist consciousness/nationalism) explicit during different periods of history (pre-colonial, colonial, pre-war and during the war). Having set the background, the paper poses two assumptions to be tested. First, during the post-war period, ‘Sinhaleness’ has been shaped not by focusing on the construction of internal homogeneity (by reducing the salience of internal hierarchies such as caste, region, and religion) but by severally contrasting Sinhalese *self* from *others* (Tamils and Muslims). Second, during the post-war period, ‘Sinhaleness’ has been shaped not by focusing on the construction of internal homogeneity but by severally contrasting Sinhalese *self* from the Muslim *other* rather than the Tamil *other*. In order to test the credibility of above assumptions this paper gathers primary evidence such as graphics/images produced in social media (specially on Facebook) from 2009 to 2018 on the basis that social media posts are a genuine representation of independent public opinion of the Sinhalese community of their internal hierarchies and their overall self-image of what ‘Sinhaleness’ means to them. Which of the above criteria (as mentioned in the hypotheses) has become salient over others? Are there any significant temporal changes? Does Sinhalese tend to equate their ethnic identity with their religious (Buddhist) identity? Data will be analyzed qualitatively to find out answers to the above questions, using content analysis tools.

Keywords: Ethnicity, Identity, Social media, Constructivism, Sri Lanka, Sinhaleness

Sport for development and peace (SDP) organizations and the sustainable development goals (SDGs) of Nepal

Jeet Sapkota
University of Tsukuba

The potential of sports to contribute to development and peace, especially in disadvantaged and highly fractionalized areas is already established in the literature (e.g., Schlenker and Sugden 2011). Consequently, several United Nations' Resolutions have been passed by its General Assembly and numerous international, national as well as local efforts have been made aiming to optimize the use of sports to achieve international development goals, especially the United Nations' Millennium Development Goals (MDGs) before 2015 and the Sustainable Development Goals (SDGs) after 2015 to 2030. Consequently, there is growing empirical evidence of sport's positive impacts on socioeconomic development and some progress in theorizing sport as a vehicle for social change. It led a rapid growth of Sport for Development and Peace (SDP) organizations indicating great potential of the SDP sector that can play a significant role in achieving sustainable development goals (SDGs), particularly in the least developed countries (LDCs). However, local SDP organizations and related government policies in LDCs have rarely been studied, and to the author's knowledge, there have been no studies conducted focusing on Nepal so far. Given the post-conflict situation of the multi-ethnic country struggling even for the basic level of human development together with the theoretical claim and empirical evidence of sport's potential contribution on peace and development, it is worthwhile to examine the SDP sector in the context of its potential usefulness to policymakers as well as development practitioners.

Therefore, this paper explores the grassroots SDP organizations in Nepal and their potential contribution to peace and development of the nation. The national nongovernmental organizations (NGOs) data is gathered from the NGOs database of the Social Welfare Council (SWC) of Nepal, and the national SDGs framework and other policy documents are reviewed thoroughly. The results show that 'Youth and Sport' related NGOs are proliferating since 1990, increasing from 157 to 3,799 in 2000, and recently reaching 11,886 in July 2017. These NGOs contribute to the achievement of SDGs in many ways, such as helping grassroots participation, boost social capital, reaching remote areas where the government cannot reach, and empowering women and other socially disadvantaged groups. However, the government has had no independent and organized SDP policy so far, and the related policies reviewed in the several policy documents are also not well linked with the national SDG framework and remain far apart from the global SDP movement. To develop a well-functioning SDP sector in countries like Nepal, we suggest further exploration of the 'Youth and Sport' NGOs to understand the ground reality of these ever-escalating number of grassroots NGOs. Developing a comprehensive, independent national SDP policy that accelerates the achievement of SDGs in Nepal is also intrinsically valuable.

Memories of The Second World War and Tourism Industry in North East India: Community's Way of Narrating War Experience

Haruna Watabe
University of Delhi

The aim of this paper is to examine how the Nagas narrate their experience during the Second World War, and the process of war tourism emerging in Nagaland and Manipur. The Nagas inhabit in North-eastern part of India such as Assam, Nagaland, Manipur, Arunachal Pradesh, and India-Burma border. During the Second World War, fierce battles took place in both Nagaland and Manipur, and the Nagas were heavily involved in the war. It is referred as “The Imphal invasion” in Japanese history, where the Japanese and the Allied forces fought in the region. Although the Nagas were dragged into outsider’s war, they were rarely mentioned in any books published by Japanese veterans. On the other hand, many stories about the Japanese soldiers are told among the Nagas. Recently, the growing touristic interest for the region has led some villagers to not only speak of, but present their stories in other ways, such as constructing private museums and monuments. This phenomenon may indicate that the interest towards the war from the outside has shaped the Nagas understanding of their experience in a certain way. Hence, this paper will consider the Nagas attitude towards the past, and how the past experience is shaped or modified in the present society.

As many historians have pointed out, histories inevitably speak to and of the present. The Nagas narratives concerning the war may contradict or differ from time to time, and some narratives have a potential to omit complex social issues. Therefore, the war experience is narrated and being modified in the present, and this process creates “new” narratives. In addition, several factors such as interviewers themselves (gender, age and nationality), types of listeners, and political situations may affect to form the patterns of storytelling. For example, privately owned stone monument in Manipur has a Japanese inscription, which shows that the purpose of constructing the monument is not only limited for the village, but also for visitors, especially the Japanese.

Globally, preserving the war experience is regarded as an urgent matter. Therefore, to collect narratives from those who experienced the war has a significant meaning. This paper will encourage us to consider the meaning of preserving war memories, and to understand the background of the narratives. Furthermore, it will examine the tourism industry in the region which could explain the formation of their narratives. This attempt will show us a different aspect of the Second World War in Northeast India, which has not been focused by the Japanese. As a result, this gives not only a broad view on the history of contemporary Naga society, but also an understanding of the war from the perspective of the Nagas.

**The Law Related to the Sexual Minorities in Pakistan:
Contradiction between ideal and reality**

**Liu Gaoli Kyoto
University**

Pakistani law is based upon the legal system of British India; thus, ultimately on the common law of England and Wales. On the other hand, Islamic Sharia law is also incorporated into Pakistani law, as well as a system of law employing traditional methods persists at the local level. Both common law and Islamic law influenced the country's judicial development and people's views. Since 2009, the supreme court of Pakistan gave a judgment of protecting the transgender rights and ordered the National Database Registration authority to issue the legal ID card on transgender identity. Following the order, each province of Pakistan has made its own legislation and provincial rules on transgender protection as an active response. Most recently, in March 2018 the Senate approved a bill of empowering transgender to determine own gender identity. Meanwhile, some Islamic leaders also made voice admitting transgender rights from religious aspects. The legal environment for the transgender people seems friendly and fulfilled the ideal of the human rights protectors. But, the sexual minority group claimed that they had not benefited from the laws. They want real rights. Their voice was listened by the OHCHR in 2017. A local representative made the first ever shadow report of Pakistan under the International Human Rights Law system.

This paper makes a summary on the series developed laws and rules in Pakistan since 2009 related to the sexual minorities and compares it with the rights requested from the local community thus suggested by the UN OHCHR. It examined the contradiction between the real legal situation and the ideal of the local community, as well as the contradiction between the local interest on protecting transgender with the protection of human rights of sexual minorities under the interest of International law.

パキスタンにおける障害の開発協力へのメインストリーム：当事者の声を反映して Mainstreaming disability into development cooperation: Learning from the voice of disabled people

長田こずえ

名古屋学院大学 国際文化学部 国際協力学科 教授

今回の発表は、パキスタンにおける障害者の実情、障害の原因と結果、障害者政策の枠組みなどを、現地の障害当事者たちの生の声を反映して、開発と障害の視点から分析した研究の要約である。筆者は過去にもイスラム教諸国における「障害の開発へのメインストリーム」課題に関する研究発表をしてきた。本稿においても、障害を開発と国際協力の観点から捉え直し、南アジアのイスラム教国、パキスタンにおける「障害と開発」へのアプローチ構築を試みる。パキスタンにおいて障害者は通常の開発プロジェクトから排除されつつあり恩恵を受けることができない場合が多い。例えば、インフラプロジェクトがユニバーサルデザインでなかったり、ODAによって建てられた学校が障害者を受け入れなかったりする場合が頻繁にある。障害と貧困は密接につながっている。また、ジェンダーはこれに新たな側面を加え問題をさらに複雑化する。パキスタンの女性障害者は二重、三重苦を強いられている。女性という性別 (sex) の問題と機能障害 (impairment) のみならず、社会的文化的障壁 (disability & handicap) と貧困をも加えた三重苦を負わされている。障害、貧困、開発と国際協力、それぞれに関連のある課題である。貧困は障害を生み出す原因でもあり、同時に障害の結果でもある。障害者や女性の社会的排除や無力化は国家の持続的な経済開発を妨げる要因にすらなりえる。パキスタンにおいては、障害を開発問題とみなす取り組みは始まったばかりで、障害者のニーズや他のマイノリティー課題を開発協力プログラムに組み込む (いわゆるメインストリーム化) 試みは不十分である。他方、国際社会においては過去数十年の間に障害に関する概念は大きく変化した。障害を個人的な問題と考え、障害をインペアメントの観点から定義し、医療的治療やリハビリテーションなどを優先させ、専門家中心の大規模隔離施設や特殊教育などを運営していく、いわゆる障害の医学モデルは批判にさらされ始めた。医学モデルから、障害当事者が中心になりバリアフリー社会、メディアキャンペーン、差別禁止法など社会の側に変化を求める、障害の社会モデルへとパラダイムが移行した。社会モデルが誕生した欧米では、障害者のリハビリテーション、施設、障害予防などは時代遅れの医学モデルとみなされタブー視されている。JICA などを含む ODA 機関にも障害の社会モデルが導入され制度化され始めた。自立生活支援、障害当事者主体、障害問題専門家派遣とピアカウンセリング、社会の側の変革への政策支援、などの欧米型の Independent Living: IL 路線が主流となり、社会—医療折衷モデル型の国連 WHO が推進する Community-Based Rehabilitation: CBR や ILO の職業訓練などですら古臭いとみなされる傾向にある。社会モデルは先進的であるが、果たして本当にパキスタンのような途上国の障害者のニーズに答えているのであろうか。医療的な介入はさておき、障害の原因予防や CBR なども古臭く、草の根の当事者主体の精神に反するものなのであろうか。これが筆者の研究のメイン課題である。先進国の押し付けはあらゆる形で見受けられるのであるから、IL もそうである可能性はある。実態としては、パキスタンの一般の人々の間では、障害問題はあくまでも慈善事業や福祉課題とみなされている。障害はジェンダーと同様、政府の政策においては優先順位の低いものとして扱われているのが現実である。障害者の視点は、行政サービス、立法、国家予算のどの分野においても、十分に反映されていない。障害を持つ人々は社会の片隅に置かれ、教育、訓練、社会参加、就職、結婚などに関して差別されている。残念ながら現時点では、パキスタンに暮らす障害者たちの実態調査や社会的な状況に関する国家レベルでの調査はまだ存在しない。従って、本研究においては、既存の統計や資料、個人研究者のペーパー、筆者が国連ユネスコのパキスタン所長時代 (2011-2014 年) に現地に滞在しながら収集した障害当事者や政府担当者の生の声 (インタビューやフォーカスグループ)、筆者自身の視察・観察などの資料を基に、障害と開発の接点を「障害者の人権」的ホリスティックな観点から分析する。特に、フォーカスグループを通して参加者たちと一緒に構築した、障害と開発へのアプローチ 障害の権利モデルは、現在主流になりつつある欧米型の、あるいは JICA などが前向きに促進する、自立生活 (Independent Living: IL) 型のものとは少し違っている点についても説明する。CBR は時代遅れではなく、障害当事者にとって家族やコミュニティーとの絆は大切である。同時に職業訓練、起業支援、CBR などの活動は、草の根の障害者たちにとっては古臭いものではなく、優先順位が高い。社会モデル—辺倒の ODA 政策も、草の根の障害者とその家族たちの声に耳を傾け少しだけ引き返し、社会改革と障害者自身のエンパワーメント両方のツイントラックを目指す、より包括的な政策を模索する必要があるのではないだろうか。

インド州政府の産業政策：政治経済学的分析

Industrialization Policy by Indian State Governments: A Political Economy Explanation

加藤篤史 (早稲田大学アジア太平洋研究科) ・

福味敦 (兵庫県立大学)

本研究では、農村のジニ係数を富農層の政治的影響力の代理変数、都市のジニ係数を産業資本家の政治的影響力の代理変数にとらえ、これらの変数が送電・配電損失(T&D Loss)に与える効果を1980年から2010年までの28州のデータを用いて推計を行う。

研究の背景として、大きく3つの先行研究がある。第1に、産業政策の選択・執行についての政治経済学的分析の研究が挙げられる。開発経済学の既存研究は経済発展あるいは産業化を促進する政策ツールについて膨大な蓄積を持つが、それらの政策を選択・実施する政府とそうでない政府がある。政治経済学では政策の選択・執行の決定要因に関する研究が行われており、本研究は既存研究に依拠し、主に富農層の政治的影響力がT&Dロスを引き起こす可能性を検証する。第2に、本研究は政治的恩顧主義(Clientelism)の先行研究にも関係する。本研究では支持者が盗電をはたらいとも政治家の介入によって見過ごすことで、電力を政治的取引の道具として使う可能性についても検討を行う。具体的には、Wilkinson and Kitschelt (2007)の研究に基づき、政治的競争、所得水準、集団間の社会的分断が恩顧主義的な政治取引の道具として電気が使われる可能性を、T&Dロスへの影響を見ることで検証する。第3に、本研究はインドの電力部門に関する政治学、経済学、社会学などの先行研究に依拠している。

推計の結果、農村のジニ係数は非常に頑健に正の係数をとっており、われわれの仮説と整合的な推計結果となっている。すなわち、農村の所得分配が不平等な状況では、少人数の富農層が政治的行動を調整して取りやすくなり、また多くの金銭的富を政治家や貧しい有権者への影響力を行使するために使用できるので、彼らに有利な政策の選択・執行を促すことができる。本研究では、政治家に影響力を行使できる富農層の政治的な働きかけによって、農村に広範に見られる盗電が十分な取り締まりを受けずに看過されることを示唆する推計結果となっている。また、一人当たり所得も頑健な負の係数をとっており、所得水準が高まるとT&Dロスが減る傾向が見て取れる。これはWilkinson and Kitschelt (2007)の命題と整合的な結果である。社会的な分断の代理変数として用いた宗教的多極化指数はそれ自体は有意な係数をとらなかったが、一人当たり所得との交差項が有意な正の係数をとっており、一人当たり所得が持つT&Dロスを低下させる効果を弱める、すなわち恩顧主義を持続させる効果をもつことを示唆している。

また、インドでは莫大なT&Dロスと産業・商業向けの割高な電気料金のために、企業が自家発電装置を設置し、電力を社内で発電供給する場合が広く見られる。そこで、自家発電量の総電力に対する比率を従属変数として、農村のジニ係数がインド電力部門の歪みを通して産業部門に悪影響を与えているかを検証した。その結果、農村のジニ係数が統計的に有意な正の係数を持つことが示された。このことは、農村の富農層の利己的な政治的行動が、電力部門の歪みを通じて産業部門にまで負担をかけていることを示唆している。つまり、農業部門の利己的な目的を目指した政治的な影響力が産業の発展を阻害している可能性を示している。

(参考文献) Wilkinson and Kitschelt (2007) *Patrons, Clients and Policies*. Cambridge University Press.

日本メディアのインド報道と「中国ファクター」 ‘The China factor’ in the Japanese media coverage of India

湊 一樹
アジア経済研究所

新聞やテレビなどのメディアによる報道は、その受け手の「擬似環境」(頭のなかで作上げられた世界)を形作るうえで重要な役割を果たすと指摘されてきた。例えば、ある国の「実像」とは異なる「イメージ」がメディアによって生み出されている場合、一般の人たちがその国について誤った認識を持つようになってしまう可能性があるということになる。

本報告では、(1) 日本のメディアが作り出すイメージとインドの実像との間には、どのようなギャップがあるのか、(2) イメージと実像の間のギャップを生み出す要因は何か、という2つのリサーチ・クエスチョンに沿って、日本のメディアのインド報道の特徴とその構造的要因を検討する。具体的には、インドに現地支局を置く日本メディアの在インド特派員とその経験者など18名(新聞社5社、通信社1社、テレビ局1社)に対して、2017年2月から報告者が行ってきた聞き取り調査の内容、さらには、新聞・雑誌記事のデータベース「日経テレコン」を用いて収集した過去の記事と集計データに基づいて、以下の点を指摘する。

第1に、インドに対する関心の高まりと広がりにもかかわらず、日本のメディアでインドが取り上げられ機会はそれほど多くない。さらに、1998年から2017年までの20年間に、「インド」または(インドを意味する)「印」という言葉が見出しに使われた記事の数および総文字数は、朝日新聞と読売新聞とともに緩やかに減少している。日本のメディアの国際報道が主に対象としているのは、米国・中国・朝鮮半島(北朝鮮と韓国)であること、さらに、大規模なテロやクーデターのような政変といった、派手でわかりやすい事件はインドではあまり起きないことなどが、その背景にあると考えられる。

第2に、インドと中国の対立・摩擦、中国に対抗するための日印協力など、中国の動きを絡めたニュースは記事になりやすい傾向がある。実際、聞き取りを行ったすべての在インド特派員(とその経験者)がこの点を指摘しており、「中国の悪口を絡ませると、ニュース・バリューが上がる」(特派員F氏)、「記者になってから、(インドが中国を)『牽制』という言葉がこれほど使ったことは今までにない」(元特派員T氏)、「インドに本当にそういう意図があるかどうかはわからないが、『中国を牽制』と書くと紙面に載る」(特派員M氏)といった発言が聞かれた。さらに、同様の点はインドだけでなく、インドよりも取り上げられる機会が圧倒的に少ない、インド以外の南アジア諸国により当てはまる。

特に後者の点については、一般読者になじみのない国の出来事を、限られた紙幅のなかでわかりやすく書かなければならない特派員にとって、「中国」というのは便利な切り口であるだけでなく、ニュースへの関心を高める手段ともなりうることで、そして、日本人の嫌中感情(台頭著しい中国への脅威感と劣等感)が、日本のメディアのインド報道(および南アジア報道)に反映され、日本社会における支配的価値観と共振している可能性があることを指摘する。そして、このような「インドに対する派生的認識」によって、日印の結びつきやインドの実力が実態以上に過大に評価されてしまう恐れがあると論じる。

モディ政権下における学術機関・批判的知識人へのヒンドゥー至上主義的介入 および攻撃

Hindu Nationalistic Interventions in Academic Institutions and Attacks on Critical Scholars under the Modi Government

馬内里美

東北文化学園大学

[報告要旨]

大学運営に市場原理の導入が図られ、**University Grants Commission** の廃止および新たな **Higher Education Commission of India** の創設を、モディ政権は目指している。大学経営の自立が促される一方で、大学への補助金は条件付きのものとなり、研究生対象の給付金廃止、縮小、学費の値上げ等がすでに実施されている。大学と学問の独立性が失われることが危惧されている。一方で、モディ政権下では、ヒンドゥー至上主義化を目指しているが、学問と教育も重要なターゲットとなっている。本報告では、政権が人事を通して教育機関や文化機関へ介入する例、右派学生組織が、左派学生組織を、政治家や警察、更にメディアを巻き込んで攻撃する事例、さらにヒンドゥー至上主義に批判的な学者を攻撃する事例を、雑誌 **Frontline** の記事から紹介する。

モディ政権が、人事権を利用して、ヒンドゥー至上主義者たちを高等教育機関、文化機関等の要職に就任させる例は多いが、その中には、ヒンドゥー教・神話的な歴史の書き換えを目指す人物が率いる **Indian Council of Historical Research** も含まれる。国際色豊かな大学として新設されたナーランダー大学は、アマルティア・センの学長再任不承認、理事会構成員の大幅入れ替えを通して、保守的なインド的大学に変容しつつある。ネルー大学は、学生活動が盛んで、反体制的であるとヒンドゥー至上主義者たちから批判されているが、副学長に保守的な人物の就任直後に学生逮捕事件が起きた。その後も、研究生への出席の義務付けや、**Centre for National Security Studies** 新設とそれに伴い予定されていた講座「イスラムテロリズム」が物議を醸した。

各大学で左派学生組織が活動妨害を受けている。右派学生組織が、保守的な大学当局、警察、政治家、さらにメディアと協力して、左派学生組織の活動を攻撃して、大事件に発展する事例もある。2015年から16年にかけて起きた IIT マドラス校でのダリト学生左派組織認定取消、ハイデラバード大学でのダリト学生への厳しい処分と学生の自殺、ネルー大学での扇動罪による学生逮捕を取り上げる。

このような動きはインド国内にとどまらない。欧米の批判的視点でのインド研究に対する反感、インドの宗教的観点からの教えを求める運動が、在外インド人も含めたヒンドゥー至上主義者たちによって行われている。「ヒンドゥー教徒の感情を傷つける」として批判的書物を攻撃する運動が行われている。訴訟を受けて、インド国内での書籍の出版差し止め、および回収処分に **Penguin** 社が同意した事例もある。また、批判的学者に対して大量の中傷メールを送り付ける事例もある。

学問と教育の分野において、盲目的な信仰の推進と、批判に対する暴力的な攻撃が与える影響は小さくはない。本報告では、その一端を紹介したい。

Armed Conflict and the Peace Process in Nepal

**Purna Bahadur Karki, Ph.D. Post-doctoral
research Fellow Institute of Global Studies,
Tokyo university of Foreign Studies**

This study investigates two main aspects of the Maoist insurgency in Nepal: first, the relationship between the history of Nepal and the origin of the insurgency, and, second, some of the possible tools used for negotiating the ongoing peace process. This study examines the Nepali civil war from the perspectives of conflict resolution tactics such as traditional and indigenous conflict approaches, which are believed to be useful in minimizing further conflict. From the perspective of conceptual analysis, a purposeful, rights-based approach will be suitable for reconciliation in a post-conflict nation such as Nepal.

This research deals with Nepal's post-conflict situation, which categorically lacks implementation of the understanding reached between the Seven Party Alliance and the Communist Party of Nepal (Maoist) CPN (M), especially after the signing of the Comprehensive Peace Accord (CPA). The rule of law is not effectively enforced and state mechanisms function poorly, thus making way for crimes to be committed with impunity. Similarly, the paper studies how Nepali political parties and leadership lack the civic culture required for building an advanced society. The sociopolitical gap between people living in different regions and communities hinders the establishment of a sustainable society. A post-conflict country such as Nepal needs political passion, tolerance, reconciliation, and change in the attitude of leadership for social mobility; political participation of the common people at the local level is a necessity. A consideration of Nepal's political culture of leadership and civic culture of the people is important to develop it into a functioning state.

Further it deals with the history of CPN (M) and the link between its ideology and the nature of the Nepali people living in the hill regions. Similarly, this study examines the unique nature of the Nepali peace process. The level of impunity, misuse of state power, and the general state of anarchy in the country encouraged criminals to practice extra-judicial human rights violations, giving rise to contradictions and conflict. A conceptual analysis of the conflict and the identification of an appropriate solution are preconditions for minimizing the ongoing problems and achieving reconciliation in a post-conflict nation such as Nepal. This study also explores the negotiation process and the entire development of the peace process in addressing the common problems of the people.

Temple Tanks and Sanitation: Analysing Colonial Urban Policies of Varanasi

Mahesh Madhav Gogate

Asian and African Area Studies, Kyoto University

Varanasi, one of the age-old cities of India once had a huge network of interconnected temple tanks and ponds with streams and river Gaṅgā. For the ages, these water tanks are eulogized as sacred water places and considered as an integral part of the social, cultural and religious activities. The city came under the direct colonial administration in 1794 and predominantly thereafter the temple tanks and ponds were strategically reshaped, filled in and converted into public spaces such as roads and parks. This paper argues that colonial urban policies marked the decline of these ancient water reservoir system. The colonial urban policy of the ‘dry city’ dominated the city planning.

This paper mainly draws references from the topographical map prepared by James Prinsep, a British officer stationed at Varanasi. Prinsep published the map of the city in 1822 and mapped the numerous temple tanks and ponds along with temples and main streets. This research study mainly analysed the James Prinsep’s map of 1822 and map of 1914 and compared it with the satellite imagery and field observations conducted in 2016 and 2017. The Geographical Information System (GIS) tools were used to map and calculate the existing water bodies. This exercise revealed that many titled and untitled water tanks are completely vanished in last two hundred years. These findings are important and explains the urgency for further comprehensive research of sacred water bodies.

This paper specifically addresses a gap in the literature concerning the decline of sacred water bodies and explored the colonial discourse which had significant impact on the urban planning. The paper analyses the history of the emergence of municipal bodies, colonial discourses of sanitation and safety, centralization of natural resources, urban transformation and its impact on surface water bodies in Varanasi.

**Technological Interpretation of Archaeological Materials:
Based on Thin-section Petrography learned from Japan**

Dr. Dilruba Sharmin

Assistant Professor, Department of Japanese Studies, 1037 Arts Building, University of
Dhaka, Bangladesh

Abstract: Analysis of archaeological materials has assisted archaeologists in three focused areas: (a) chronological construction (b) technological interpretation and (c) interpretation of ancient societies. Thin-section petrography is a useful methodology for the study and classification of fabrics. In this paper, ‘Polished thin-section method’ is used for the technology analysis of the collected samples of Bangladesh, Japan, China & Korea. In this paper the manufacturing technique of the archaeological pottery was studied on the basis of the thin section observation under a microscope, which is called ‘Polished Thin-section Method’; the modern version of this method was introduced by Japanese Professor Dr. Fumio Okada. Scientific analysis of these cultural materials is important not only to distinguish the technology or characteristics, but also to understand the spread of regional culture related to the analysed material. Different types of biological microscope and Scanning Electron microscope were used for observation of the collected samples. Approximately 15 thin-sections were prepared from each case study. After microscopy observations, it is clear that, slip was very common on the early-historic pottery of Bangladesh. This research does not find ‘slip’ as a surface coating of East Asian potteries, although ‘Carbon coating’ was common on the prehistoric black colored pottery of Japan and China. Lacquer technology was used as a variety and beauty of the numerous archaeological wares of Japan, China and Korea which is absent in the case of Bangladeshi pottery. Archaeological ware, both earthenware and wooden wares was studied to understand the quality and technology of these early-historic and historic wares.

Keywords: Ceramics, NBPW, Thin-section, Petrography, Culture, Heritage, Bangladesh, Japan, China, Korea.

**Inscriptions on Large Objects
as a Source for the History of Bihar and Bengal of the Pāla Years (9-12th centuries)**

Alexander Stolyarov

a) Institute of Oriental Studies of the Russian Academy of Sciences

b) Russian State University for the Humanities

The whole set of North Indian Early Mediaeval Inscriptions may be roughly divided into three groups: a) land grants written mainly on copper plates or partly on stones, b) inscriptions on large objects, and c) inscriptions on small objects. While land grants may be regarded as a separate group with its own properties, it is not easy sometimes to tell the difference between inscriptions on large and small objects. However, inscriptions written on rocks or stones as well as on columns, stelas, details of architecture, etc., may be named as the inscriptions on small objects.

There are 30 inscriptions on large objects discovered at present that mention the name of a certain Pāla ruler, and their number is steadily growing from decade to decade.

These 30 inscriptions dating from the beginning of the 9th till the second half of the 12th centuries are distributed on vast areas of modern Indian states Bihar, West Bengal, and also Bangladesh.

Being in their essence texts written by feudatories like medium rulers, ministers, army commanders, etc., or by some communities like monks or merchants, they carry valuable pieces of information regarding the social, economic, and religious position of persons described, their surroundings and interrelations.

So, it is possible to divide them by centuries, by regions of concentration, by social and religious affiliation, etc.

The peculiarities of spatial and temporal distribution of these inscriptions under study as well as their social, economic, and religious meaning are to be discussed in this presentation.

Kinship as Fiction: Exploring the Dynamism of Intimate Relationships in India

Chair

Yoko Taguchi, Hitotsubashi University

Presenters

Anindita Majumdar, Indian Institute of Technology-Hyderabad

Yoko Taguchi, Hitotsubashi University

Chihiro Nakayashiki, Kyoto University

Yumiko Tokita-Tanabe, The National Museum of Ethnology

Discussant

Mizuho Matsuo, The National Museum of Ethnology

This panel aims to explore the idea of kinship as ‘fiction’ through ethnographic analysis of intimate relationships in India. Focusing on ‘fiction’, we look into how particular fictions are narrated and enacted within the constraints of reality, and how reality is in turn generated by fiction in the context of kin and other intimate relationships.

This panel invokes both classical and contemporary studies of kinship since the essential question of what kinship is has returned to anthropology with a newfound vigour. Studies of South Asian kinship, including the structuralist formulations of Louis Dumont and the transactional relations explicated by McKim Marriott, have inspired anthropological theories in general. As Janet Carsten discusses, anthropology of kinship has come to discover broader forms of ‘relatedness’, reconsidering the established binary of nature and culture, or the biological and the social. Relatedness has gained renewed interest also in South Asia, beyond the traditional caste hierarchy, including relations mediated by science and technology such as blood donation, organ transplants, and surrogate motherhood. In short, the concept of relatedness enables us to see more dynamic and processual aspects of kinship.

To further contribute to this field, this panel investigates kinship as fiction. In classical anthropological theory, kinship was synonymous with the taken-for-granted biological relatives. In this vein, relations in the form of ritualized cohorts, friends, or mimicked blood ties were considered ‘fictive’ in opposition to a ‘real’ biological standard. Over time, however, fictive kin have become ‘real’ in different ways. In Kath Weston’s privileging of ‘kinship by choice’ amongst LGBTQ communities, or in Carol Stack’s understanding of neighbourhood ties amongst African-American women, the new kinship studies seek to re-engage with kin from the standpoint of ‘fictions’ that generate reality.

Engaging with transnational commercial surrogacy, middle-class householding in Mumbai, Tibetan relatedness in Spiti Valley, and relationships of care in Odisha, the panel attempts to contribute to existing scholarship on kinship by examining the role of fiction and narrative in intimate relationships. (Co-authored by all the panel presenters)

Of the fictionalised real:

Parentage in disputed commercial surrogacy cases between India and foreign countries

Anindita Majumdar

Indian Institute of Technology-Hyderabad

This paper begins with the problem of de-recognition of children born through commercial gestational surrogacy in India to foreign couples—and the ‘manufactured’ parentage that legitimizes their nationality, and identity. The focus is on two cases in particular: Japanese Baby Manji who was unable to travel back to Japan due to the complex laws there regarding surrogacy and parenthood; and the German Balaz Twins who were restricted from travelling to Germany due to the ban on commercial surrogacy.

Juxtaposed with ethnographic data from India amongst foreign and Indian couples, the aim is to reflect on how kinship occupies a fraught terrain of choreographed relationships that are created for the sole purpose of legality and identity. In this process ‘kinning’ often involves deliberate misrecognition, in order to mimic kinship in its ‘idealised’ form. Here, I suggest that such a process is different from the one pursued in transnational and domestic adoption, as documented by Signe Howell, in the fleeting temporality that these relationships cling to. I explore the role of the ‘mother’, ‘father’ and ‘surrogate’ in the elaboration of kinship as fiction, and vice versa.

The fiction of ‘fluid nuclear units’:

Domestic workers and middle-class householding in Mumbai

Yoko Taguchi

Hitotsubashi University

This paper discusses contemporary middle-class householding in Mumbai, focusing on domestic work and the fiction of the nuclear family. Householding refers to the active creation and maintenance of the site of life, not restricted to *family* through marriage and biological relation.

David Schneider’s depiction of American kinship as a symbolic system of *code* and *substance* highlighted cultural differences regarding kinship, and this was extended through the idea of inseparable *substance-code* in Indian kinship. However, as this idea traveled from the USA to India to Melanesia to global reproductive technologies, the focus increasingly became the transaction of bodily substances. Indeed, the real-ness of this ‘hard’ biological substance, the main criticism raised by this line of anthropological kinship studies, has reemerged with the development of technologically-mediated kinship studies. Meanwhile, the

sharing, maintenance, and creation of substance-codes seems relegated to the softer side, along with shared time, memories, and imagination.

This paper, therefore, extends the idea of substance-code in classic Indian kinship studies and looks at the more mundane but equally essential formation of relatedness through householding. Studies on the global movement of domestic workers and the subsequent reconfiguration of householding urge us to think beyond the modern social imaginary of the nuclear family. Nevertheless, this imaginary of the nuclear family retains real significance, often serving as people's motivation to try out different kinds of householding and thus causing the above-mentioned changes. To address this phenomenon, this paper employs the idea of fiction as a narrative form of the social imaginary. The way we imagine, narrate, and create fictions are constrained by reality, but we also generate reality by creating fictions within the constraints. Focusing on one Mumbai household, this paper investigates how domestic workers and the nonconventional relations of family and in-laws are mobilized around what an informant calls "fluid nuclear units." It thereby examines the pursuit and creation of a particular nuclear family fiction.

Doubting kinship:

A case of kinship among Tibetan people in North India

Chihiro Nakayashiki

Kyoto University

This paper aims to clarify how people in Tibetan society in North India recognize their own kinship relationships and are affected by the tactically-created kinship through examining the concepts of 'fiction' and 'reality'.

In Spiti valley, there is a category of kinship, called *nirin*, which is different from genealogical ties, but is created through relatedness in people's daily lives. *Nirin* are kindred in nature recognized through both patrilineal and matrilineal lines by ego and also including affinities of an especially close relationship. In the election campaigns, however, party members decide tactically who they call *nirin* and try to behave as if they have been *nirin*. Those who have genealogical ties but aren't usually recognized as *nirin* are called *nirin* and receive pressure from party members. In this case, they doubt their relationship as being *nirin*. Conversely, people sometimes recognize their friends or neighbors as real *nirin*. In short, people ascertain whether their relationship is doubtful or not. Nevertheless, the *nirin* being doubted sometimes affects people's voting behavior. In other words, the fiction of *nirin*, in which *nirin* should help each other in any difficult situation, shapes people's reality.

This paper tries to show that the phenomenon which is mentioned above cannot be understood by the concepts of tactics and morality in kinship studies which are related to the

level of the motive. It is necessary to understand the phenomenon by the concept of fiction. This paper tries to think about ‘fiction’ and ‘reality’ as forms of recognition of kinship for local people. This way of understanding the concept of fiction is different from the one in fictive kinship studies.

A house of one’s own:

Fiction of new kinship narratives in emerging opportunities for women in rurban Odisha

Yumiko Tokita-Tanabe

The National Museum of Ethnology

This paper examines how new narratives on kinship in rurban areas of coastal Odisha generate conditions that enable women to buy and build their own houses, hitherto an unimaginable feat under patrilineal, virilocal norms of the region. By ‘rurban’, I refer to newly developing residential areas which are spatially located in-between rural and urban zones. In such areas, we find hybrid sets of values that combine village and city aspects. Rurban residents do not have to contend with imposing extended families or blatant caste discrimination as they would in villages where everyone knows each other. At the same time, they are not faced with alienation and loneliness of city life where people are indifferent towards their neighbours. Rurban residents maintain a mutually understood, comfortable distance with each other. It is precisely this novel relationship between people which allows women to exercise agency that counters patriarchal, patrilineal, virilocal conventions. Availability of educational and employment opportunities nearby, as well as affordable land prices and building costs also make it easier for rurban women to buy property and build houses close to their natal homes. Moreover, what is significant about the rurban area in my study is that it is not only the well-educated middle class women who take advantage of the new openings. Poorer women without much education are also able to exercise agency in returning to live where they were born and brought up. Hence there is a wide range of women from different socio-economic backgrounds who do not act according to the traditional kinship norms and conventions. Breaking these conventions involves fiction of new narratives about ideal kin and human relationships that justify the women’s actions. This paper explores the mutual construction and affirmation between such narratives and the lived realities of kinship and intimate relationships.

日本南アジア学会第 31 回全国大会報告要旨集
Proceedings, The 31st Annual Conference
The Japanese Association for South Asian Studies (JASAS)

2018 年 9 月 20 日発行

発行者 日本南アジア学会第 31 回全国大会実行委員会
〒920-1192 石川県金沢市金沢大学内